Cosmic Philosophy & UFOs

GAP-JAPAN NEWSLETTER
季刊日本GAP機関誌

# 宇宙哲学とUFO

SUMMER 1982
No. 78

火星に生命が存在！

## 私は異星人から何を学んだか

G.アダムスキー

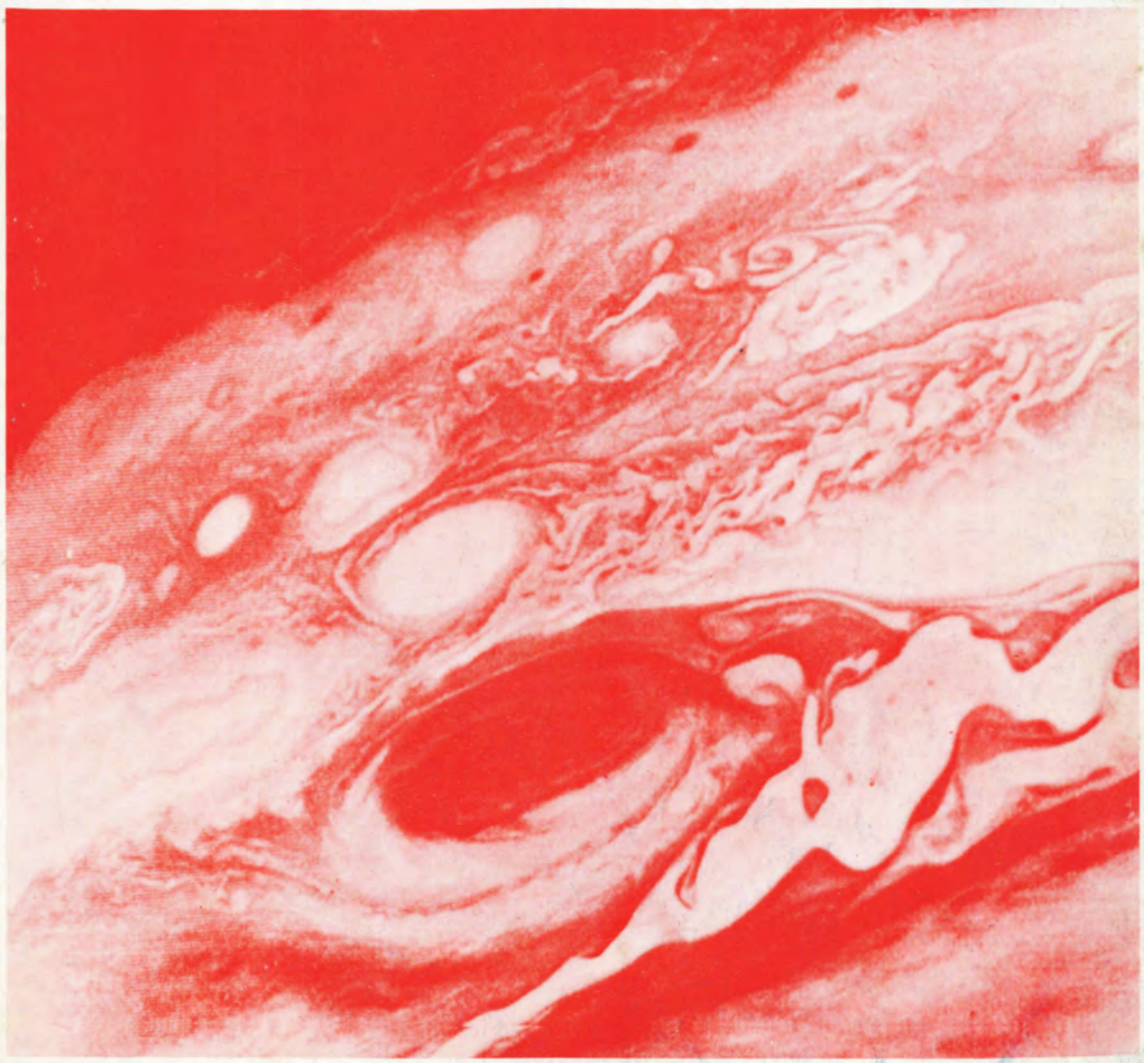
札幌市でアダムスキー型円盤、目撃さる

アダムスキー型円盤、旭川に出現！

沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る！

宇宙と愛について(2)

波よ静まれ、そして風も　久保田八郎



宇宙哲学とUFO　第78号目次


火星に生命が存在！……1

〈さらば空飛ぶ円盤(6)〉
私は異星人から何を学んだか　G.アダムスキー ……2

札幌市でアダムスキー型円盤、目撃さる ……10

アダムスキー型円盤、旭川に出現！……10

沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る！……14

宇宙と愛について(2)　久保田八郎編 ……16

波よ静まれ、そして風も　久保田八郎 ……20

「沖縄支部大会と南国の旅」に参加して　参加者一同…27

〈映画解説〉十戒……30

読者の声「コズミック・ポスト」……33

〈報告〉群馬支部大会／沖縄支部大会……36

〈予告〉今年度地方支部大会（その３）……38

〈予告〉今年度日本GAP総会 ……39

日本GAP全国月例研究会案内……40


■表紙写真は1979年２月25日、木星・土星探査機ボイジャー１号が木星から約920万キロメートルの位置で撮影した謎の大赤斑（下方の黒い楕円形の部分）と流れる白雲の群れ。

## GAPとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。


★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他誌への無断転載を禁じます。

# 火星に生命が存在！

## 元NASA研究所長の研究結果、火星には確率九十パーセントで生命が存在するという最新の宇宙科学情報。

宇宙開発の分野では我々の太陽系の地球以外の惑星には生命が存在しないというのが定説になったかのごとき感がありけれどもそうではない。元NASA（米航空宇宙局）研究所の所長でコロンビア大学教授のロバート・ジャズトロウ博士は地球外生物の存在を主張する人で、特に火星の生物存在は九十パーセントの確率をもつという。以下は今年五月二十五日付産業新聞に掲載された博士来日の際の質疑応答の一部である。

●この写真は1976年、火星探査機バイキング1号が1152マイルの上空から火星の大クレーターを撮影したもの

**問**　博士は、火星に生命があるとすでに発表しておられるようだが。

**答**　火星を対象とした生命探査計画のバイキング計画で、火星の岩石を三回処理した結果、二回は生命の存在を示す化学反応が現れ、三回目には微生物や細菌など、真の生命がいる証拠をつかんだと私はみている。これらの実験結果を米国の科学者は、よくわからないのだが、火星には微生物がいないらしいと発表した。ソ連が革命七十五周年を記念して、一九九二年に人間を火星に送り込む計画を進めているので、もしソ連の科学者が火星に行って土壌を分析した結果、生命を持つものは見当たらなかったと報告したら、火星に生命が存在すると早々と発表してしまった科学者は、職を失うことになるから、慎重なのだろう（笑）。

しかし、実験の結果は、火星にどうやら微生物や細菌のようなものが存在するらしいのだ。火星の土を三カ月保存しておき、微生物の餌に放射性の炭素十四を与える。もし化学反応が起こるとすれば、保存前と保存後でも、同じ反応になるはずだ。ところが、実験の結果では、三カ月後には同じ反応が出なかった。つまり、三カ月の間、餌を与えなかったため、微生物が死んだことが考えられる。

また、実験容器内の温度を、化学反応には低すぎる温度だが、微生物には高すぎる摂氏三十八度にあげたところ、実験装置は途中から信号を送ることをやめてしまった。このことからも、火星の土のなかに微生物が存在するらしいことが推測できる。このほかいろんなテストの結果、微生物検査はすべて正の反応を示した。私は、火星に生物が存在する確率を九十パーセントぐらいだと考えている。

**問**　もし火星にも生命が存在することが確認されれば、宇宙のあちこちで生命が発生する可能性を示していることになる。

**答**　太陽系には九個の惑星があり、地球と火星にそれぞれ独立した生命が発生したとなれば、惑星に生命が発生する確率は九分の二。もしこの太陽系で、生命を宿しているのが本当に地球だけとなると、まさしく生命は奇跡で、発生する確率は実に一兆分の一ぐらいにまで落ちてしまう。そこで、ひとつの太陽系のなかに、二つも生命をもつ惑星があることがわかれば、宇宙に生命が存在する確率は非常に高くなる。木星探険は、宇宙に関する二つのナゾのうちのひとつを解くことになる。

×　　×

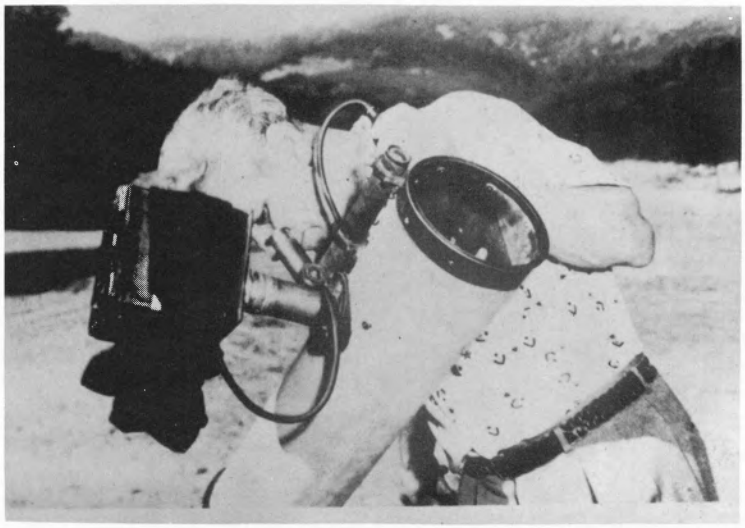
ジャストロウ博士は天文学者で宇宙生命問題の権威。永年、NASAの研究所にいて、宇宙科学の研究を実践面から支えてきたが、退官後は、一人の学者に戻って、大胆な学説を展開している。なかでも注目を集めているのが、宇宙生命の存在。

最近は研究の興味を、天文学から生物の進化、生命の歴史へと広げ、最近では急速に発展するコンピューターを、シリコン・ブレーン（頭脳）と名づけて、研究の対象に入れている。アメリカ宇宙開発科学界のトップクラスの一人。大気圏外生物存在論者である。

連載第6回 さらば空飛ぶ円盤 第9章

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

# 私は異星人から何を学んだか



## 彼らは正体を明かさずに地球人に会っている

私がカリフォルニアの砂漠で（金星人の）オーソンと初めて会って以来数年間、私は異星の友人たちと多くの会見をしてきた。そのなかには全くの思いがけない出会いもあったし、また『宇宙船の内部』（注＝邦訳版『宇宙からの訪問者』の第二部）に述べたように、私が期待して行われた会見もあった。特定な日時と場所をきめて彼らと確実な約束をすることは全然できなかったし、また彼らの集まりのなかにいて有頂天になることもなかった。しかし私が彼らと多くの会見をなしたとはいうものの、地球上に住んでいる異星人の全部を私が知っているわけではない。それは私が各都市や町に住むあらゆる人を必ずしも知っていないのと同様である。

多くの機会に聞かされたことだが、私は相手が異星人であることに気づかないで彼らの訪問を受けたり話し合ったりしたということであった。この場合彼らは自分自身の正体を明らかにしないのである。数度の機会に私は宇宙船内で一人か二人の異星人に会ったとき、以前に相手が異星人であることに気づかないで話し合ったことのある人だということがわかった。

多くの人々が、実際無数の人々が、相手が異星人であることに気づかないで異星人に会って話し合ったことがあるということを私がこれまでにたびたび話したり書いたりしたのは以上の理由からである。多くの異星人が世界中の産業界や政府などで働いているのだ。彼らはまた各国の軍隊にも入っていて、同胞を虐殺する訓練の要求されない科学の各部門、通信、医療関係の集団内で働いているのである。

## 地球にいる異星人の特長

現代の世の中では各個人についてずいぶん多くの身分証明書類を必要とするにもかかわらず、いったいどうしてそんなことができるのか（地球の各機関へ潜入することができるのか）という質問を、私はこれまでに無数に受けてきた。しかしこれは地球人にも不可能な問題ではないのだ。身分証明書を入手する方法はいくらでもある。これが疑わしいと思う人はその問題を調査するとよい。多くの驚くべき事実を発見するだろう。

異星人は親切さ、腹を立てないこと、また、ときとしてテレパシーの能力などが抜群であるといわれている。しかしテレパシーはこのごろ地球でも多くの人が興味を持つようになり、その応用に多少とも成功しているのであるが、これは一種の科学なのであって、仕事中のスペース・ピープル（宇宙人）は素晴らしいテレパシーまたは異常に強烈な予感力などのために、そばにいる人を驚かせるのが普通である。

しかしここで読者に警告しておきたいことは、テレパシーを応用したり予感またはフィーリングによる印象に従ったりする人のすべてを異星人と考えてはなら

ないということである。あらゆる面でバランスのとれた心を保つようにした上で、異常な能力を持つ人を見る場合にこれまで多くの人がスペース・ピープルにたいしてなしたような一種の神としてでなく、その人柄によって判断をするべきである。

『宇宙船の内部』の刊行以来、世界中の人々は他の惑星から来る人を実際に崇拝するようになった。異星人に会いたい、そして地球上のレッスンが避けられる別な惑星につれて行ってもらいたいという人たちから私は無数の手紙を受け取っている。しかしこれは前記の書物の目的を完全にはずれているのだ。

これまで述べてきたように、私と異星人との会見はきわめて偶発的なものであった。そして私と読者とが一杯のコーヒーかビールでも飲みながら話し合うのと同じように、私と異星人は地球や地球人、それに地球人がみずから作り出した諸問題などについて語り合ったのである。

## 地球は美しい聖域である

『宇宙船の内部』にも書かれてあるように、人間というものは最上の状態にありながらも、ときとして傲慢になりがちである。その天罰について教えられているにもかかわらずだ。このことは大宇宙を通じて時折起こり続けているのであって、我々の想像し得る最も高度な発達をとげた惑星でもあることなのである。宇宙の法則は人間が他の人間を破壊することを禁じているので、傲慢な人は低級な惑星へ移動させられて、かねて教えられているその天罰がその人を待っている事実を体験するかもしれないのである。というのは、他の教化の方法によって学ぶよりも体験を通じて学ばれるよきレッスンを記憶することが人類の特質であるからだ。大昔に地球はこの太陽系内でこのような傲慢な人々を移動させる惑星として選ばれた。しかしここで一つの重要な点をはっきりさせておこう。

以前こんなふうにお話ししたために、多くの読者は、地球はただの刑場にすぎないのであって、その住民は喜びや幸福を得る機会をほとんど持たないのだと速断してしまったが、これは誤っているのだ！

それは宇宙の法則にもとづいた作用なのであって、他の惑星に住む人々の個人的な決定によるのではない。理解力と同情心において我々の狭い概念をはるかに超えているスペース・ピープルからこの点を私はきわめてはっきりと聞いている。この地球は、大宇宙の無数の太陽系を構成している惑星、太陽、衛星などのすべてを建設したのと同じ創造主によって造られたのである。それは全宇宙のいかなる場所とも等しく聖域なのだ。住民が破壊的な態度を克服して社会的にも科学的にも地球を凌駕している多くの惑星よりも地球は美しくさえあるのだ。もし人間がどこにいようとも余裕をもって大自然の美しさを観察するように努力するならば、偉大な創造主によって地球人に与えられた多くの祝福に気づかざるを得なくなるだろう。

最大の都市でさえもそこには博物館や公園などがあり、そのなかには花、小鳥、樹木があり、更にあらゆる種類の昆虫さえもいる。我々がほんの数分間をついやしてそのどれか一つを仔細に観察しただけでもこれらがきわめて美しいことがわかるのである。しかし人間は生きようという努力と財産を得ようという熱望で夢中になっているために貪欲のとりこになってしまい、自己の関心を多種類の小さな生き物の破壊に向けているのだ。

## 金星の宇宙的な農業

ところがこれに反して、大自然を仔細に研究している金星の人々は、自然の万物が一定の目的のために造られていることを学んできたのである。それゆえに彼らは毒薬を散布したり人工肥料を用いたりはしない。彼らはすでに学んでおり、我々はいま学びつつあるのだが、ある昆虫類が毒薬のために死滅すれば破壊的な力を持つ他の昆虫類はその自然の敵がいなくなるので飛躍的に繁殖するのである。その結果、小鳥も、毒薬をあびせられている自然の食物が得られなくて犠牲者になるのだ。

産出力のバランスを保つのを助けるために小さな生物が創造されたのだ。これらの生物が作物や植物の何割かを食べるので我々はいまそれを毒殺しており、それで今日、人類は健康という面で大きな代価を支払っているのである。

こうして自然の原理や動機に関する理解力の不足と、加えて人間の金銭と努力でもって得られる限りのものを得ようという貪欲さのために、人間は大自然との戦いに突入している。我々は一つの連鎖反応を作り上げているのであって、あとを辿ってみると、それが低級な昆虫から人間自身に至るまであらゆる生命に影響を与えていることがわかるのである。

我々の世界でずいぶん一般化してしまった人工肥料を用いるかわりに、金星の農民は根覆い（注＝木の根を保護する敷きワラなど）や施肥として自然の生産物の何割かを土地に返してやる。肥沃の土地から産物を絞り取ることをしないで、彼らは輪作を励行し、土地に周期的な休息を与えるのである。

このようにしていたわるので、とれる食糧は健康を保つのに必要なきわめてすぐれた自然の栄養分をすべて含んでいる。

この種の話を私は何度もくり返し聞かされたけれども、これは非難としてではなく地球上に今存在している多種類の病気にたいする分析として聞かされた事柄である。そのような病気は毒薬散布の戦いが自然の小さな生物にたいして始められるまではまだ一般化していなかったのだ。我々が自然の研究に返るならば、万物が一定の目的のために創造されたことを我々も学ぶだろう。我々は多くの物象の基礎をなす原因から関心をそらせてしまい、唯物主義におちいってしまったので、自然のもとへ帰ってその有様や目的などを理解し、自分の態度を自然の原理に一致させるまでは苦しまねばならぬような多くの条件下に自分を置いているのである。

## 地球は一種の幼稚園

我々の惑星は一つの教室にすぎない。ここには学ぶべきレッスン（教課）がいろいろあるのだが、それは太陽系内の他の惑星では見い出すことのできないものである。しかし大宇宙を構成する無数の銀河系には我々の太陽系の複製物が多くあり、そのなかには我々の太陽系よりも未発達なのもあれば、より高い発達をとげたのもある。だが子供が小学校や高校の課程を学んで大学進学の準備をととのえるまでは大学生の問題を解くことができないのと同様に、人間は進化の大道づたいに一定のレッスンを学ぼうとしないで生命の梯子段を一足飛びに登ることはできないのだ。

我々は地球を幼稚園にたとえてよいだろう。そこでは多くの個性を持った幼児が勉強したり遊んだりしている。ここには生意気なのや喧嘩好きなのや、臆病なの、内攻的な外攻的なの、我慢強いのや短気なの、親切なのや意地悪などがいる。そしてこれら各個人が互いに調和し合うことを教えるのが幼稚園の課業の目的である。こんなふうにして自己抑制ができるようになり、団体としての調整がうまくゆく。

地球でも宇宙的な生命と知性の経路である肉体の目的と作用の基本的な原理が教えられている。想念の起こりや力も、それが個人とその環境をもとにして現し得る結果とともに学ばれる。そして高まりゆく理解力とともに、より大いなる感謝と喜びと成就とがやって来るのである。

わが惑星がその住民のためにそなえているこのようなレッスンに気づくことなしに、我々は数千年のあいだ人類というものは地球だけに存在する独自なものであると教えられてきた。その結果、もろもろの規則が作り出されて、我々は宇宙に遍満する大いなる法則を考えたり学ぼうとしたりすることなしに、その人間の規則によって生きているのである。

人道主義者ならばだれでも同じであろうが、異星人も地球人や地球人の考え方、行動の仕方などに関心を持っている。先生が生徒にたいしてするように彼らも地球人が宇宙的な生命の諸法則を学ぶのを手伝うために地球へ来るのである。すぐれた教師は決して生徒をやりこめたりはしない。生徒の精神や考え方を理解することによって、知的に未発達なその若い人たちを援助しようと努力する。異星人もこれと同じ態度で奉仕するのである。彼らは自分自身を地球人に押しつけようとはしないし、また優越的な態度をとろうともしない。むしろ、我々が自己の想念や行為のなかに含まれている諸法則を理解していないということを認め、また彼らの調和ある生き方を示すことによって、同じことをやってみようという願いを地球人に起こさせることを望みながら地球人のあいだに混ざって生活しているのである。

## 地球人と金星人との相違点

私を訪ねて来て「この地獄の地球から脱出して金星の平和と幸福のなかに生きてみたい」と大声で語っていた多くの人々のことを私は決して忘れない。ところが、私がこの人たちにむかって「あなたがたは金星人として生きたいのか」と尋ねると、別にそういうわけではないと言う。つまり彼らは自分だけの好き嫌いを克服することを望んではいないのだ。彼らは一、二の理由で、自分と同じ教育を受けていないか、皮膚の色や宗教が異なるか、または事業や金儲けにさほど成功していないような同胞よりも自分が優位にあると感じることを好んでいるのである。しかし地球の人類を分裂させているのはこの種の好き嫌いなのだ。

金星にも地球と同じように皮膚の色や知的レベルや職業などでやはり差があるけれども、地球のような分裂状態は存在しないのである。したがって前述のような人々が現在の態度のままで金星へつれて行かれるならば、それこそ地球よりももっとひどい地獄の苦しみを受けることになるだろう。なぜなら彼らがすすんで好き嫌いを克服しようとしない限り、やはり自分だけはその気持を持ち続けることになるからだ。

他人にたいして権力を誇る人々が地球にいる。彼らも万人が平等とみなされている惑星へ行けば自分がきわめて惨めなことがわかるだろう。そこでは教育または共同社会としての面で他人にたいする権限をまかされた人は、同胞のなかにあって最も謙虚な召使いでなければならないのだ。これにはもちろんある心の状態、すなわちごくわずかの地球人しか持ち合わせていないような〝愛〟を要するのである。人間はこのレッスンを書物で学ぶことはできない。ただ生き方によって学び得るだけである。そして地球は、同じレッスンを学びつつある他人のあいだにあって人間がこのような生き方を学ぶ機会を与えられている場所なのだ。

地球には自分の家族や友人知己などにたいする所有権を感じている人々がいる。こんな人は往々にして他人の行為や想念にさえも指図することを全く当然の権利だと感じている。しかし金星人は決してこんな態度をとることはない。彼らは創造主によって与えられた各人の天賦の自由を認めている。そして必ずしも一個人が他人の考え方に従って考えたり行動したりはしないかもしれないが、謙虚さと同情により各人が創造主から与えられた万人の生得権である自由というものを認めるようになっているのである。

謙虚な人は万人を平等とみなし、同一の創造主の子であると見る。この子たちは同じ生命の呼吸をし、同じ大地からとれる食物を楽しみ、同じ日光で支えられ、同じ月の光をあびているのだ。各人は学習ばかりではなく奉仕という目的を持って生まれている。だれもが完全に他人の立場にとってかわることはできない。各人は自分自身の道を旅しているのであり、明白な条件のもとに現在という瞬間にたどり着いたのである。

他の惑星の人々も我々と同じようにやっているのである。彼らもまた毎日レッスンを学びながら人生の行路を旅しているのだ。

地球に来ている異星人はときとして、我々地球人の生き方によって一般人を悩ませているような圧迫や緊張に耐えるべき基礎を自分が築いていないことを発見する。この場合、彼らは自分の惑星に帰らなければならない。そして、もし彼らが時日の経過とともに我々の世界のレッスンを体験によって学ばねばならないという時点に達したならば、基礎を築くためにこの地球に生まれかわらねばならない。そしてその基礎によって地球のレッスンを学ぶのである。一方、理解力や自己の抑制力に関して充分に生長している人は、それらの圧迫や緊張にわずらわされることなく、冷静な態度で地球上の日常生活に起こる諸問題に直面することができるのである。

▲アダムスキーとメイ・フリットクロフト夫人

## 想念とエネルギー

私がこれまでに異星人たちと行った会見の多くは主として私自身の問題と可能な解決法を扱ったものである。彼らは同胞にたいして決して忠告をしないが（注＝直接対面して口頭で伝える忠告、他人に想念を伝達する不思議な能力を持っている。その能力のために想念を受けた人はそれが自分自身の想念だと思い込むほどである。こうして受けた当人はその想念を認めてそれに従うか、または他のだれかが自分に忠告したのだとは考えないでそれを捨てるかは本人の自由である。異星人たちとの会見に続いて起こる私自身の想念と行為を注意深く調べながら、私はこのことを自分で学ばねばならなかった。しばしば私は自分が感受した想念とは全く反対な方向へ進んでいる自分を発見したが、これはすべて私が理解をしていなかったためである。この点においては個人のかなりな訓練を要するのであって、私にはこのレッスンを習得するまでにまだはるかに遠い道が横たわっている。

異星人について私が気づいた別な事柄は、彼らはたわむれたり、歌をうたったり、ダンスをしたりすることや、あらゆる種類のスポーツ、さらに地球のラジオ、テレビに似た装置で映画や教育番組などを見たりすることを好むという事実である。しかも彼らはいつも静かなのだ。彼らはあまり喋らない。これは彼らが説明してくれたのだが、口で喋るということには多くのエネルギーがついやされるからである。地球上で行われる日常の談話の大部分は時間の浪費なのであって、話し手ばかりでなく面前の相手をも疲れさせるのだ。多くの人は、まだ理解していないある神経エネルギーによって絶えまなく大声で喋っている。地球人で自分自身を理解しているか、またはこうした理解力を得ようとして時間と思考と努力をついやしている人はほとんどいない。我々が正しく生長して宇宙の別な教室（注＝別な進歩した惑星）における生活のために準備をしようとするならば、自分の想念とそれが自分や他人に及ぼす影響を理解することに大きな関心を持ち始める必要がある。そして自分の心をこの想念の出所と、自分がその想念のとりこになる理由のほうへ向けるのである。実際、人間は自分の想念の主人公にならねばならないのに、いったいどれだけの人がそうなっていることだろう。

## 異星人の言語と幼児教育

私はこれまでに他の惑星の生活法、その家庭、住民の関心事、その他あらゆる種類のくわしい状態を知らせてくれと何度も頼まれてきた。しかしこれは、ほんのわずかな人に会っただけで全世界の住民や状態を知らせることができないのと同様に不可能なことである。

この数年のあいだ私は近隣の惑星群から来た人たちと会ってきた。彼らの個人的な外観からみると、そのどれも普通の地球人と全く見分けはつかない。私が会った人のほとんどは金星人であったので、私は他の惑星よりも金星のことを多く聞いている。地球上では多種類の言語が用いられるけれども、各惑星では惑星ごとに一種類の言語が話されるだけである。しかもそのどれもがみな異なっている。だから宇宙の旅行者（異星人）が惑星から惑星へと訪問してまわるときは、訪問先の世界で話される言語に関心を持ってそれを学ぼうと努力する。それでも彼らが地球へやって来て国々を旅行しようとする場合に多くの言語を学ばなければならないほどの困難事ではない。すべての惑星には地球と同様に土地、島、大陸、水域などがある。他の惑星群以上に多量

の水が存在する惑星もあるが、水は大気と生命を維持するのになければならぬものである。

近隣の惑星群では教育は人間の出生とともに始まる。新しく生まれた子供は、その想念のパタンや自然の関心を知るために愛情をもって注意深く観察されるのである。だからといって乳幼児が家庭でわがまま一杯に育てられる特権を持っているというわけではない。地球ではそれがあたりまえになっているのだが！ 初めから子供は謙虚さの価値とその報い、他人にたいする思いやり、愛することと愛されることの限りない喜びなどを教えられるのである。幼児は自分の自然の美しさや才能が、特権として応用するために創造主から与えられた贈り物であると教えられるのだ。

## 宇宙的に生きるための原則

宇宙の隣人たちは生きるための原則を持っている。これは子供の生活を基礎づけるための土台であって、大人は大抵はこれから外れないようにしようと努力するもので、次のとおりである。

**(1)日常の健康と慰安にとって実際に必要な物だけを望むこと。**

**(3)偏愛することなく万人を平等とみなすこと。**

**(3)自分の想念を観察しコントロールして、それをいつも宇宙的な状態に保っていること。**

(3)は地球人にも彼らにも必要なことであって、彼らがいつも注意し続けている重要な問題なのである。彼らは必ずしも物事に成功ばかりするわけではない。彼らも完全に克服していない感情を持っているからだ。しかし自分が間違いをやっていることに気づいたならば、利己主義の回り道に踏み込んでいない人はただちに宇宙的な方向へ転じて、自分の誤りを、くり返すためではなく記憶するためのレッスンとするのである。

**(4)万物が奉仕し合っていることにたいして感謝をすること。**

これは日々新たに始められることで、彼らは創造主に奉仕するために日々がもたらす多くの機会を喜びと熱心さをもって迎えるのである。

彼らは自分自身や自己の想念とか印象などを調べているので、地球人がおちいりやすい偏見でそれらを歪めるよりも、その純粋なままにそれらを認めてそれに従って行動することを知っている。こうして彼らの手になる作品は地球では見られない自然の発光できらめくような美しさを放っているのである。彼らの石、金属、鉱石などはこの世界のものと異なってはいないが、地球に行き渡っている悲観的な態度がないために、それらの自然の響きは高いのだ。

## 金星の生活様式

**〈家屋〉**金星の家屋は地球の家屋と同様に快適さのためと自然の諸条件に従って建てられている。多数の人がいることからして当然考えられるように、そこには多様な建築様式がある。彼らの家屋は快適さと楽しみのために必要なだけの大きさにとどめてある。家族によってはその興味のためにむしろ芝生、花園、水泳プールなどが付属している家を好むのもある。これも地球人と同じだ。またあまり世話のいらない小型の家屋を好む家族もある。このような好みのために設備品を入手することができる。

**〈親密さ〉**彼らの生活上の教訓がつくりあげた重要な相違点は、地球式の生活態度と異なって、彼らの親密さである。たとえば他人の水泳プールや芝生、花園などを楽しむのにいちいち招待を受ける必要はない。万人が友人同士だとみなされて友人として歓迎されるからだ。こうした設備類は個人的に所有されるのではなく、万人の楽しみのために開放されているのである。

**〈事業〉**地球と同様に人々の福利と慰安のためにさまざまの種類の事業が必要となってくる。建築物が建てられねばならないし、あらゆる種類の工場は生産物を供給するために必要である。農民は食物を生産するために土地を耕作する。大きさや様式の異なる店（複数）は需要者に必要品を供給する（注＝ただし金銭は存在しないので金を出して買うのではない）。熟練した作業員が公共物や設備類を修理し続ける。人工の物は何でもきずがついたり破損しやすいからだ。

**〈動力〉**彼らが用いる動力は宇宙船に用いられるのと同じ自然のエネルギーである。したがって地球の動力につきものの煙やゴミは出ない。しかし大自然は地球と同じように金星にも嵐を起こすので、金星の塵埃と地球のそれとにほとんど相違はない。

**〈清掃〉**彼らは地球人以上に清掃という問題を解決してしまっている。家庭や仕事場などの各建物には磁気的な吸引装置が仕掛けてあって、舞い上がっているホコリが下へ落ちないうちに中央の容器の中へそれを引き寄せてしまうのである。この容器は定期的に集められ、再生工場へ運ばれて、そこでホコリは貴重な無機物にするため再生処理が行われる。これは地球の大工場などから出るガス類を集めて副産物として有用な元素を抽出するのとよく似ている。

**〈料理法〉**主婦にとって料理は簡単で容易である。食物のほとんどは自然の状態のままで食べられる。彼女らが料理する食物は重要なミネラルを保持する目的で急速に簡単に準備されるが、地球の主婦ならば大抵の場合は材料を浸したりするためにミネラルは洗い流されてしまうだろう。金星の主婦は続いて透過放射線で急速に料理するのである。地球でも同じような装置が開発されつつあるので、いずれは主婦のために市場へ出るようになるだろう。

皿を洗う方法については私はまだ知っていない。これは多くの地球人の心の中で非常にわずらわしい問題となっているようだ。

**〈クリーニング〉**金星人は地球の超音波利用による方法に似た処理法を応用して衣類を清潔にしている。衣類をあるキャビネットの中へ入れさえすれば、水や地球の洗剤などを用いるよりももっときれ

いになるのだ。この方法によれば生地は元の新品の状態になる。こうして長持ちをさせ、その自然の美しさをとり戻すことができるのである。この処理法はすべての生地のクリーニングに応用される。そして約三分間を要するだけである。あらゆる家庭やホテルのような公共の場所には、必要に応じて大きさの異なるこのキャビネットが一つまたはそれ以上設置してある。

**〈デザイン〉** 地球と同じく、衣服をデザインしたり作ったりすることの好きな創作力を持つ人々がいる。一般人のためにこれをやる人もあるし、家族のためや、こうした趣味や才能を持たない友人たちのためにやる人もある。彼らは自分の仕事を重い負担にすることはない。これは彼らの精神的態度と想念のコントロールのためである。彼らは自分に課した仕事は何でも徹底的に楽しむことを知っている。我々も同じ事がやれるのだ。そうすることを望んでその目的の方へ自分を向けるならばだ。たしかにそれはむつかしいことだが不可能ではない。

**〈乗物〉** 彼らは素晴らしい公共輸送システムを有しており、しかも実際に必要とするもの以上を望まないために、私物としての乗物を所有する人はほとんどいない。多くの地球人も気づき始めていることだが、所有物が主人になることがあって、所有者が逆に振り回されて余分の世話や仕事や出費などで縛られることを彼らは知っているのだ。

**〈ロボット〉** かつては手仕事としてなされていた重労働のほとんどを彼らはロボットにやらせている。このために労働者は研究と生活の楽しみに多くの時間が生み出せる。しかしあらゆる種類の機械類を考案したり作ったりするにはやはり人間の心を必要とするのだ。その想念を万物に向けるときに人間は創造者になれるのである。

**〈学校〉** 学習は生涯の仕事であって学校の数年間だけに限られるものではない。彼らの学校は美しい壮大な建物で、その中では生活の科学が教えられている。

他にも多くの科学が教えられる。そのために彼らの惑星の歴史、去来した文明、我々の太陽系内の他の惑星群の歴史、そして別な太陽系群の歴史などを描いた模型が設置してある。

**〈エデンの園の意味〉** 我々の聖書に述べられた『エデンの園』について彼らが語ってくれた説明に私は興味を持った。これは人間の理性が狂って、我々が〝霊魂〟と名付けている人間のあの永遠に生きる部分に関する知覚から人間が分離するときに起こる絵画的な表現なのである。

創造的な力と英知との一単位である宇宙的な人間すなわち〝霊魂〟が肉体を建設し、それを生長させ表現しているのだ。ゆえに人間が自分のこの永遠なる部分を意識して生きる限り、決して老いることはないし、いかなる圧迫や緊張をも体験しないのである。しかし推理する心、すなわち個人のエゴが主人になるならば、審きが起こって分裂が発生し、その結果人間を没落せしめて、ついにはその時期の文明の崩壊を招くのである。

アダムとイヴの物語は人類の歴史を描いた寓話である。人間が自己の実体を知覚しているならばその運命は幸福であるけれども、個人的な感情――貪欲という誘惑者や嫉妬など――に支配されるならば、本人は『エデンの園』から出て、エゴによって作り上げられる苦難の世界へつれて行かれるのだ。

放蕩息子が帰って来る物語は、苦難を通り抜けて〝無限なる創造主〟の子としての真の状態にふたたび気づくようになった謙虚な人間の描写である。これに気づくときに平和と喜びが元の所有者に返って来るのだ。

**〈教育〉** 多くの教育は地球のラジオやテレビに似た装置を用いて行われる。形成や崩壊の過程にあるミニチュアの太陽系模型による実物教育がなされている。宇宙旅行ばかりでなく惑星上の望遠鏡式装置による観測を通じて学習しながら、彼らの学校における使用目的のために作られた模型類の助けをかりて宇宙の諸法則が教えられるのである。授業は年齢別によるのではなく、人々の関心に応じて行われる。だれも自分の興味以上に押しつけられることはないし、また一般の〝平均〟に照らして自分の進歩を抑えられることもない。地球の教育組織に慣れて生長している我々にとっては、これは全く無意味に聞こえるかもしれないが、興味というものが無限なるものにたいするより大きな理解のための刺激物になっている惑星では、人間が退屈や無関心に支配されることはないのだ。

**〈宗教〉** 地球にあるような個々の教会などは存在しない。なぜなら彼らの日々の生活が、我々ならば彼らの〝宗教〟と名付けるかもしれないものになっているからだ。彼らの生活態度と宇宙の法則の理解をもってすれば、宗教的な教えと日常生活との区別などはあり得ないのである。創造主の家（大宇宙）の中では万物の永遠の融合があるからだ。〝無限なるもの〟の意志に従えばより以上に充分に生きることができ、それによって永遠の生命の行路を進んで行けるということを知るために彼らは研究しているのである。

**〈旅行〉** 子供たちは学校ばかりでなく家庭でも教えられる。人は学校の授業に出席するのをやめるほどに老けはしない。金星では年齢の如何にかかわらずだれもが金星上を定期的に旅行したり、巨大な豪華宇宙船で宇宙の他の場所を訪れたりする。記録類やミニチュアの複製物などによって多くを学ぶことはできるけれども、旅行こそは尽きることのない実際的な教育の源泉であって、それが楽しみだけでなく、決して忘れることのできない永遠の価値を持ったレッスンを与えることを彼らはよく知っているのである。

**〈病気と健康〉** 金星の人々は心や肉体の病気というものを知らない。これは地球人の性格上の差別感すなわち好き嫌いや何かの審きなどによって生じるような緊張を起こさないからである。このことは『宇宙船の内部』にも述べてある。地球人がわずらっている最も多い難病（ガンその他）を治すことのできる知識を異星人は我々に与えてくれないものだろうかという質問状を私は多数の人から受け取った。この問題は多くの機会に話されて

きた。

我々だれもが知っているように、人体はこれまでに創造されたもののなかで最も完全な機械なのである。それは完全なバランスと調和を保って作動するのだ、そうしてやりさえすれば――。肉体のどの器官も部分も、他のすべての部分よりすぐれているとか、他よりもよけいに働かされているといった態度をとることはない。個人の心がこのような協力を許してやる限り、各部分はその義務を自由に楽しく遂行する。唯一の例外はある種の不具であるが、これは多くの場合、妊娠中の両親の無知に帰せられる問題である。しかしそれでさえも肉体のよく発達した部分が余分の責任を引き受けて、調和を生み出そうとし、初めに描かれた完全な原型どおりに肉体を再建しようとするのである。

地球の科学者はこのことを知っている。彼らは心が肉体とその各機能に及ぼす凄まじい影響を学びつつある。しかし一般の人々は、緊張、気苦労、その他あらゆる種類の感情がどんなに自分の健康に影響を及ぼしているかを知らないのだ。我々の現在の社会組織はさまざまの条件を作り出していて、だれしも自分に課される要求を遂行しようと努力するとき、その条件が、克服しなければならぬ障壁を築くのである。もろもろの種子がずっと以前にまかれており、長いあいだにそれが大きくなってきたのだ。今日人々は心臓病や数種の悪質な病気で死につつある。症状や反応の程度は異なるけれども呼吸器病はひろがっている。またさまざまの目の過労のためにかつてないほど多くの人が眼鏡をかけている。

たしかに時間をかけてリラックスする人は少ない。実際、多くの人々は肉体ばかりでなく心までもリラックスさせる方法をいったい知っているのだろうかと私は思う。というのは肉体内の状態は心の緊張の反映にすぎないからだ。我々の現在の状態は昨日今日の結果ではなく、数年前にまかれた種子の蓄積であって、それが今日までの個人の想念と行為とによって増大せしめられたのであり、このようにして育てあげられた種子は人間ばかりでなく地上の万物に影響を与えるのである。

生活態度において自然の緊張を起こさない異星人のなかには、地球の各種の状態や、過去十五年ないし二十年間に我々がひどく汚してしまった地球の大気からさえも影響を受ける人がある。

健康は個人的な問題である。だれでも毎日のほとんどを緊張というブレーキをかけたままで〝ローソクの両端を燃やす（急速に精力を使い果たすの意）〟ことを続けて、しかも健康を保つことは望めないはずだ。しかし多くの人は長いあいだこのようなことをやっていて、かなりの成功事と思われることをやり遂げるけれども、結局は倒れて数週間、数カ月、数年間も寝たきりになるのがおちである。なかには賢明な人がいて自分の悩みがよくわかっているので、その人はいかなる心配や憤慨をもすることなく物事を気軽に行っている。このような人は病気も回復することがよくあり、長生きし、一瞬一瞬が何をもたらそうともそれを楽しむのである。私はこんな人を少し知っているが、彼らは入院して休養させられているあいだに気分をコントロールすることを知り、病気の進行状態にあまりに気を使いすぎて緊張を生み出していたことを悟り、こうして新たな衰弱が起こらないうちに体をリラックスさせることができたのである。我々が自分自身をよく調べて、自分の想念と、それが自分や周囲の人々に与える影響などを観察して、余暇をつくり出しては肉体のリラクセーション（寛ろぎ）に努力するようにすれば、前記のような例を必ずしも体験する必要はない。我々がこれをやりさえすれば、驚くべき短時日のうちに、こうした努力をした人にたいして多くの物事が変化することがわかるだろう。もし世界中の人がみなそうすれば予想以上に世界的な変化が起こるかもしれない。他人よりもうんと早くリラクセーションの技術をマスターすることのできる人もあるだろう。それは忍耐と頑張りを意味するのだが、その努力をなす人にたいする報いは喜ばしいものになるだろう。

しかし警告しておきたいことがある。我々は強い決意によってリラクセーションがやれるようになるのではない。強い決意は心身をゆったりさせるよりもむしろ引き締めることになるのだ。リラクセーションは幸せな楽しさのなかに見い出される。幸せな楽しい想念は強力である。幸せな楽しさこそ人間を解放してくれるからだ。

以上の理由からして、異星人には考えられないような我々地球人の健康問題を彼らは援助できないのである。しかし彼らはいかなる非難をも含まない幸福の想念を絶えず我々に送ってくれている。ここで再度くり返さねばならぬのは、彼らは地球人を年下の兄弟とみなして心から愛しているけれども、彼らにわかっているのは、地球人は自分たちの諸問題を自分で解決することによってレッスンを立派に学ばねばならないということなのだ。我々が精神的にリラックスすることを身につけたとき、我々も彼らの援助の想念にたいしてもっと感受力が強くなるだろう。緊張した心というものは自分の想念以外のいかなる想念をもあまり感受できないのである。

ラスキン（注＝十九世紀のイギリスの美術評論家・社会改良家）は次のように言った。

「汝自身を楽しい想念の宿にせよ」

我々がこのようにするならば、もっと気楽にやれる方法が見い出せるだろう。異星人がやっているようにやることだ。自分の過ちを解き放って――だれもが過ちをおかすのだが――、その過ちが自分に教えてくれるレッスンを学んだならば、それを二度とくり返さずに行かせてしまうのだ。

〈運動〉他の惑星の隣人たちが健康を保つもう一つの重要な要素は、彼らが肉体を柔軟にするために一定の運動をすることにある。彼らは自分の肉体を、愛と誠実さとをもっていたわらねばならない、神の創造になる美しい寺院とみなしている。ダンス、水泳、その他あらゆる種類

のスポーツが、全くの快楽として楽しく行われる。彼らはリズム（律動）を楽しみ、自分の体が自然のリズムをあらわし続けるようにする。運動を苦しい労働にはしない。それは緊張を生み出すからである。幸福感と喜ばしい表現だけが運動を通じてリラクセーションを達成できるのだ。

〈**祝福**〉私はまだ他の惑星や月にさえも行ったことはない（注＝アダムスキーはこの後、宇宙船で月、金星、土星へ行った）。私がお話しできることはすべて、私を彼らとの会談の光栄に浴せしめてくれた他の惑星の人々によって私に与えられた知識だけである。万物を通じて表現される創造主なるものと〝永遠の〟現れである人間に関する彼らの概念について、長いあいだに私は理解力が高まってきた。彼らが過去を忘れて現在のために生きる能力を発達させたのはこの概念によるのである。彼らはいかなる人間の集まりのなかへ入っても祝福の心を持たないで座ることはできないという意識的な知覚力を有している。なぜなら外形は我々の言う〝人間〟であるかもしれないが、高度な理解力を持つ異星人はそれをただの人間と見ないで、罪というものを持たない、生きた状態にある〝神の英知〟と見るからである。

〈**死**〉金星の人々は個人の一生涯で数百年を生きる。そして我々が〝死〟と名付けている体験を経るのである。彼らにとって死ぬことは自分に充分役立った一軒の家（肉体）から別な新しい家（肉体）へ移動するだけのことなのだ。彼らの惑星から発した肉体の無機物はもう一度その惑星に帰ってゆく。地球の習慣のように愛する者を失ったことを悲しむよりも、むしろ金星人は愛する者が多くの住み家（惑星群）をもつ〝父〟の家（宇宙）のどこかで、新しい家（肉体）を得て現れる機会を持つことを喜ぶのである。別人を所有しようという感情はないので、別離による苦痛というものはない。彼らに理解されている真実の愛は、いかなる種類の別離をも知らないからだ。

## 地球人のレッスン

私は彼ら異星人が生きているのと同じ位置にまで進歩をとげたと言えば、これは真実ではない。しかし人間は永遠なるものなるがゆえに、まじめに努力すればそのいずれも進歩の行路を一歩遠くへ私を導くのである。それには仕遂げねばならぬ永遠の道とともに絶えまなき努力を要する。賢明な人は一瞬一瞬を生きることを学ぶにつれてこそ進歩が自分のものになることを知っている。進歩というものは常に現在においてあるものだからだ。過去は過ぎ去ってしまっている。そして人がいかにそれを変えようとしても決して変えることはできない。手を伸ばして未来をつかみ取ることも決してできない。すぐ近くまで来ている瞬間をも取ることはできない。それが到着するときこそ現在である。

以上は地球人が学ばねばならないレッスンである。地球人にかわってそれをやってくれる者はいないのだ。それはちょうど一個人が他人にかわって食物を食べて、しかも両方が利益を得ることができないのと同じである。生長と進化は個人的な問題だ。道は示されるだろうが、各人が自分でそれを旅しなければならないのだ。ある人は大通りを旅することを選んで、刻々にもたらされるレッスンに出会ってはそれをマスターするかもしれないし、それとも回り道を選ぶかもしれない。選択は各自にまかされている。

異星人たちが私に語ってくれた事柄は新奇なものではない。数千年間彼らの知恵は地球人に向けられてきた。過去において地球人はあれこれと言い訳をしながらそれを無視することを選んできた。彼らは我々にただ気づかせようとしているだけで、しかも簡単なわかりやすい言葉で幸福と平和に生きる道をなおも示している。それは子供たちのすべてにたいする〝父〟の意志である。子供たちが多くの住み家を持つ〝父〟の広大無辺な家の中のどこにいようとも——。大自然のあらゆる面に表現されているように、それは分裂というもののない永遠の融合を示す一つの生命なのだ。ひとたび我々が大自然を教師として受け入れるならば、多くの神秘的事象は全く簡単に内容を語ってくれるだろう。

## 各惑星の特長

どの惑星が程度が高いか低いかということについては、異星人はそんな区別をしていない。どの惑星も宇宙の一つの教室であり、その中で特定の教課が他の教室よりもよく学ばれ得るのである。しかし一つの完全な生き方においてはすべての教課が重要である。程度が高いとか低いとか良いとか悪いとかの区別をしているのは地球だけなのだ。

私にはわかっているが、火星は科学と工業が高度に発達している。しかし金星と同様にそこにも束縛はない。

我々が土星を枠（はかり）の象徴として描写すればそれは正しい。土星は多くの点でバランスの役目をする惑星であるからだ。太陽系に関してこの惑星は、惑星群、太陽、アステロイド帯などのあいだの枠（はかり）として役立っているのである。

金星はもちろん愛と同情のレッスンが主体となっている惑星で、それは全人類の態度と行為が基礎とすべき土台として応用されねばならないものである。

それ以外の惑星について私は特別な知識を与えられなかったが、もし地球の我々が金星人のようにもう少し自分のフィーリングを互いに相手に向け合って生きることを知り、火星人のように万人の福利のために科学的に生長し、土星人のように、遊びと休息と仕事のあいだのバランスをもっとうまくとれるようになったならば、我々は非常にうまく生活することになるだろう。我々がこのような努力をするならばこの世界の歴史は変わり、やがて我々にも太陽系という家族の中に着席する資格が与えられるだろう。

（第9章終り。以下次号）

# 札幌市でアダムスキー型円盤、目撃さる

▲吉田ゆう子さん

**突如上空に出現した円盤は療養中の姉妹を激励するかのように約十秒間停止してから去って行った――。**

**札幌市にお住まいのGAP会員吉田有希さんを知る人は多いけれども、母君のキミ子さん、妹の邦子さん、ゆう子さんも熱心なGAP会員で、まさに宇宙一家ともいうべき素晴らしい家族。このうち邦子さん、ゆう子さんの姉妹は市内の西円山病院で長期療養生活を続けているのだが、なんと昨年九月十四日に五階の病室の窓から二人がアダムスキー型の円盤をはっきりと目撃したのだ。**

**以下は去る四月二十四日に本部特派として石川公一氏（日本GAP旭川支部代表）が病院を訪れて詳細を取材した報告である。西円山病院は中央区西町の山の上に緑に囲まれて建てられており、環境、見晴らしは抜群だという。**

**石**「ゆう子さんと邦子さん、こんにちは」

**ゆ・邦**「こんにちは」（二人は微笑する）

**石**「今日はお姉さんの有希さんに案内して頂き、お二人が目撃された円盤のことについて取材に参りましたので宜しくお願いします」

**ゆ**「はい、こちらこそ」

**石**「いろいろと質問したいことがあるのですが、とりあえず大まかに円盤を目撃された日時と時間帯、それに飛来してきた方角と、どうしてそれをUFOとして確認できたのか、また、その型や色などについてお聞かせ願いたいのですが――」

**ゆ**「目撃したのは昨年の九月十四日、午後二時頃です。方角はおおよそ東に位置します。その時、私と姉（邦子）は、この五階の病室にいまして静かに本などを読んだりしていたのです。そして何げなく、ふと空を見ると、銀白色の物体が飛んでいるのに気がついたんです。それはヘリコプターや飛行機などとは全く思えないものでした。またその物体は、約十秒間ほど停止して、私達にはっきりと判らせようとでもしたかのごとく、ゆっくりと雲の中へ消えて行きました」

**石**「その物体の大きさは肉眼でどのくらいに見えましたか？」

**ゆ**「そうですね、直径七～八センチだったと思います」

**石**「それは具体的に言って、葉巻型の母船ではなくて釜型の小型円盤だったということですか？」

**ゆ**「はい、そうだと思います。しいて言えば野球帽に例えて良いと思います」

**石**「その時は邦子さんも見られていたのでしたね」

**邦**「私は妹のゆう子が、クッちゃんクッちゃんと愛称で自分のことを呼ぶものですから、何かなと思い、隣のベッドの方に視線をやると、しきりに窓の外を指さしていたんです。あとは妹と同じですが、とにかく驚きました」

**石**「二人のほかに病院内で目撃された方はおりませんでしたか？」

**ゆ**「ええ、丁度その時、廊下にいた付き添い婦の方に『ねっねっ、早く来て！』と叫んだのですが、仕事の手が離せないとかで結局のところ私達しか目撃していないようです。院内の誰かが円盤を目撃したということも聞いていませんし――」

**石**「ああそうですか。ところで、この辺はヘリコプターや飛行機をよく見かけますでしょうか？」

**ゆ**「はい、ヘリコプターは見かけることが多いです」

**石**「このあたりは景色も美しいし、とても静かですね。何となく森にいるみたいに小鳥の歌が聞こえてきますしね。病院としては申し分のない恵まれた環境ですね」

**邦**「ええ、とっても」

**石**「あの下の方に見える建物は何ですか」

**邦**「ああ、あれは寺院だと思います」

**石**「じゃあ、その寺院を目印にして言えば目撃した円盤が左の方へ飛んでいたのか右の方へ飛んでいたのか説明して頂けますか」

**ゆ**「私が目撃した時の円盤の位置は、その寺院の上あたりを少し右よりに、ゆっくりと移動するかのように飛んでいました」（注＝寺院は東に位置する）

**石**「そうすると東の方角で発見したのであって、円盤自体は北から南へ飛んでいた訳ですね？」

**ゆ**「はい」

**石**「あと気がついたことはありませんか？　何でも宜しいですが」

**有**「あの、すみません、私ちょっと不思議な体験をしているので、それをお話し致したいのですが」

**石**「ああ、どうぞお願いします」

**有**「実は妹達が円盤を目撃した同時刻に私は札幌に滞在していました（注＝当時は旭川市に住んでいた）。それで二時という時間帯は、ちょうど妹達のところに行こうと思っていたときでした。私がその日、何故札幌にいたのかと申しますと、父も数年前に他界していて、北海道はとても雪が多いものですから除雪が大変なんです。それで母も旭川の自宅を売り払い、札幌でマンション暮らしをしたいとのことで、私も札幌という町が好きだったので、ずっと計画を練っていたんです。

▲西円山病院の窓から円盤が見えた位置を示す。

そして九月十四日の二日前（十二日）、突然、内部の印象が働き、それに従ったんです。どういうのかと申しますと、『あなたは今札幌に行き、住む家をさがしに行きなさい！』という命令的な言葉でした。しかし妹達はそのことを知りませんし、母も私の行動には驚いていた様子でした。それもGAPのアメリカ・メキシコ研修旅行から帰って来たばかりだったので、暑さのために頭がおかしくなったと思われたかもしれませんね。ただ私が円盤目撃の同時刻に札幌市内にいたのは事実です」

**石**「たしかに人間は常にテレパシックになっている必要がありますね」

**ゆ**「そうそう、私思い出したことがあるわ！　あれは九月六日頃だったと思います（昨年の九月六日）。それも十四日に目撃したのとケースが似ているんです。最初は二機のヘリコプターが訓練か何かのために飛んでいるんだなあと思ったんです。そして仲良く縦に並んで、あまりにも接近しすぎるので、あら、あんなに近づいては危ないのに大丈夫なんだろうかと二人で話していたことがあるんです。そしてそれは黒い物体でしたので、はっきりと覚えています」

**石**「型（形）は判りましたか？」

**ゆ**「ちょうど万年筆のキャップを二個縦に並べた状態でした。大きさも肉眼ではそれくらいでしたし、ただやはり距離が遠いですから、すぐには円盤かどうかは判りませんね。九月十四日のは光沢を発していましたけど、九月六日の場合ですと前方部がオレンジ色に近い色でランプのように点滅していたので飛行機と見間違いすると思います。しかし通常のものとは違っていました。もしかしたら何かの合図か信号だったのかもと、あとで思ったんですが良く判りません」

**石**「おそらく、それは母船だと思いますね。しかもアダムスキー型の母船かもしれませんね。ほかに特徴や気がついたことはありませんか？」

**ゆ**「飛んでゆく方向が先ほど話した円盤とは正反対で、南の方から東よりの北に進行し、やはり雲の中に隠れるように消えてしまいました。それくらいです。ただ同じように停止していました。何秒か覚えていませんが」

**石**「すごい体験をしていますね！」

**ゆ・邦**「いいえ」（笑顔で二人とも答えてくれた。当然、同じ病室の邦子さんも黒い母船らしいものを目撃している）

**石**「ところで、ゆう子さんと邦子さんはいつ頃から円盤問題に興味を持ち始めたんですか？」

**ゆ**「旭川で家族が暮らしていた頃に姉、（邦子）と二人で晴れた夜空に星座の観測をするのが楽しみでした。天体には二人とも小学生の頃から一番上の姉（有希）もそうですが興味と関心があったようです。UFOと呼べるものを見たのはもう十五～六年前かしら、はっきり覚えていません。もしかしたら、もっと前だったかもしれませんね」

**石**「邦子さんも？」

**邦**「はい、だいたい同じです」

**石**「二回も続けて目撃された物体なんですがね、見る以前に何か特別に印象を感じましたでしょうか？」

**ゆ**「そうですね、私達は自由に動けないですからね、もし円盤が見れるなら私達の病室から見える範囲に現れてほしいなあと思っていたんです、二人とも。それに、ここの病院に来て間もなく、もしかしたら円盤が見れるかもしれないね、と話していたんです。そうしたら本当に実現したんです」

**邦**「ホントねえ」

**石**「やはり信じることが大切ですか？」

**ゆ**「ええ、そうです。私達二人はいつもスペース・ブラザーズを信じています！」

有希さんは微笑して二人の妹の顔を見ている。

**石**「最後にお聞きしますが、二回のUFO目撃の際、いずれも音響を発しないで飛んでいたのですね？」

**ゆ**「はい、全々」

**石**「写真を撮影できなかったのは残念でしたね」

**ゆ**「そうですね」

**石**「今度またいつか、お二人を激励しにスペース・ブラザーズの乗った円盤が訪問してくれると良いですねえ」

**ゆ**「ええ、期待しています」

**邦**「同じです」

**石**「今日はみなさんお疲れのところ、本当にありがとうございました。また何か情報があれば是非お知らせ下さい」

# 円盤、旭川に出現！

## アダムスキー型 高校生が撮影に成功

**少年が屋外に出るのを待ち受けたように**
**黒い円盤は音もなく上空を通過した——**

▲津田頼明君

**今年三月九日、今度は北海道旭川市にアダムスキー型円盤が出現し、しかも高校生が撮影に成功するという大事件が発生した。撮ったのは同市東旭川町下兵村に住む旭川竜谷高校二年（当時）の津田頼明君（十七歳）で、当日授業が午前中で終わったので、午後一時半頃に自宅の写真を撮るため屋外へ出て撮影をした直後に、突然黒い円盤が上空をゆっくり飛ぶのを目撃、学校の写真部員でもある同君は急いで愛機キャノンのシャッターを押して一枚は失敗、残りの一枚で見事にキャッチした＝左頁写真。　内は拡大図。同君は非常にまじめな生徒で、日本ＧＡＰの取材にも快く応じて石川公一旭川支部代表のインタビューにてきぱきと答えた上、本誌のためにカラーと白黒のプリントを提供された。以下は石川氏との問答の一部。カメラには35－70ミリのズームレンズを装着、五百分の一秒。**

**石**「津田さん、こんばんは」

**津**「ああ、どうも」

**石**「本日はお忙しいところを大変恐縮ですが、どうぞインタビューにご協力下さい」

**津**「はい」

**石**「早速ですがＵＦＯをカメラに撮影することに成功したということですが、その日時と場所、それから、どうして何の目的でカメラを持ち合わせていたのか説明して頂きたいのです」

**津**「ええ、どうしてその時（ＵＦＯ飛来時）カメラを持っていたのかということですが、丁度その日は三月九日で、学年末試験の期間中であって、なおかつ新入生を迎えるための職員会議があり、臨時休校になっていたのです。それで自宅でゆっくりと休養していたんですが、午後になって退屈しのぎにカメラをいじくりまわしているうち、以前から順番に撮影していた家屋の写真を、つまり冬から春にかけての写真を一枚とりたいと思って外へ出たんです。（今住んでいる家は昨年の秋に新築した）。そうして一回シャッターを切り、家屋全体を写したんです。さらに、今度は飼っている犬を中心にしてもう一度シャッターを切ろうとしたんです。正面玄関の横に小さなもう一つの玄関があるんですが、その場所から二～三歩きかけたところで突然ファインダーの中に、カラスのような黒い鳥みたいな物が飛び込んで来たんです。そして、すぐに、あれは何だろう？　もしかしてＵＦＯでは、と思いシャッターを切ったんです」

**石**「すると円盤かもしれない物がファインダーに入って来たので、それを撮影したということですか？」

**津**「いや、そうではなくて逆に飛んで去って行くのを写したと言った方がよろしいかと思います」

**石**「なるほど。それで時間は？」

**津**「午後一時四十五分頃です」

**石**「津田さんは高校で写真部に所属しているそうですが、実際に写真をされて何年になりますか？」

**津**「そうですね、本格的には中学三年生の時からですね。ですから今年で四年目ということになります」

**石**「それ以前は全々興味がなかった訳ですか？」

**津**「子供の頃、父にオモチャのスパイカメラというのを買ってもらったことがあるんです。そして分解したりして遊んでいるうちに興味を持つようになりました」

**石**「ところで、円盤目撃をされた日の天候は如何でしたか？」

**津**「はい。雲から言いますと、今にも何かふりそうな、どんよりとしたものでして雪が少し散らついていました」

**石**「よく旭川－札幌間にＵＦＯが飛ぶコースがあるのではないだろうかといわれてますが、津田さんはどう思いますか」

**津**「そういうことは聞いたことはないんですが、自分としては可能性があると思います」

**石**「当日目撃された後に、ヘリコプターが追跡していたり、調査しているような様子はなかったですか？」

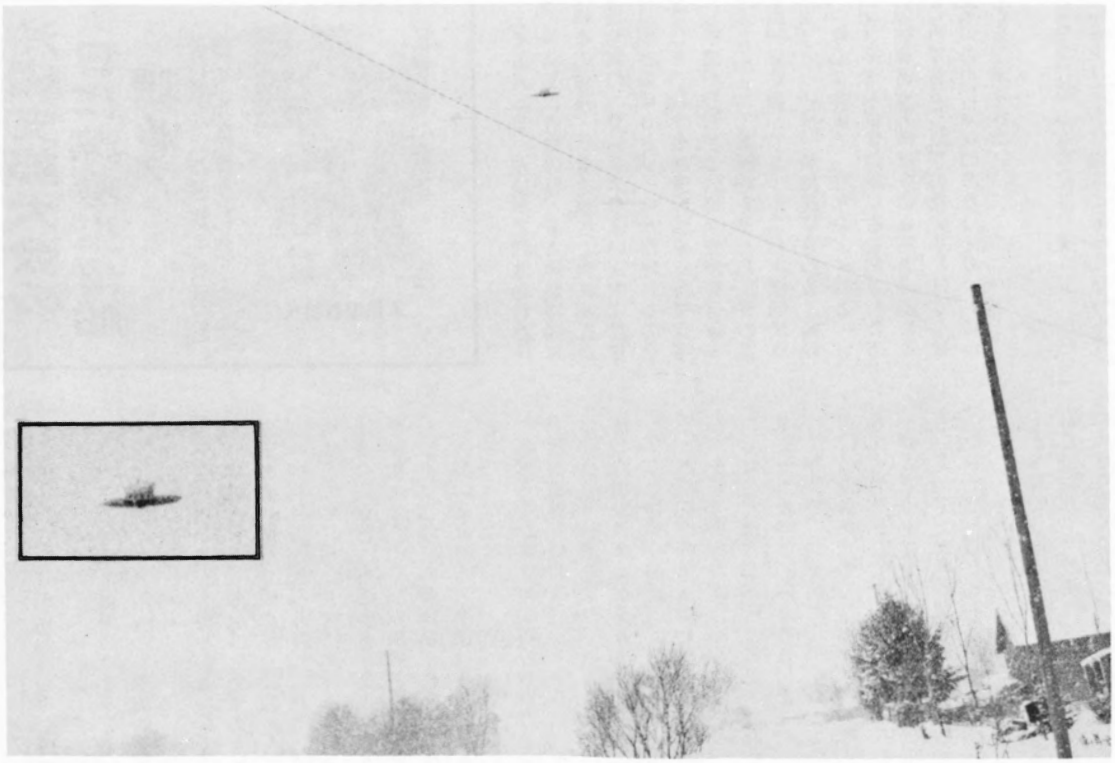
**津**「その時は判りませんが、三日後に自衛隊のヘリコプターらしいものが二機、飛んでいました。そのヘリコプターは写真にとっています。（ＵＦＯ目撃時に自衛隊のヘリコプターが追跡したという話が流れた）

**石**「写真の現像は自分でされた訳ですよね」

**津**「いや、白黒のは自分でやりますが、カラーは道具がそろっていないのでカラープリントの店に持って行きました。ただ二枚ほどネガを切り取られていたんです」

**石**「そういうことはよくある事ですね」

ところで、円盤の型なんですが、アダ



▲津田頼明君撮影の円盤。4個の丸窓と3個の球型着陸装置が見える。

ムスキー型のものと同じであると聞いたんですが本当ですか?」

**津**「はい、目撃の際はよく判らなかったんですが、あとでその写真を新聞社の方(北海タイムス旭川本社)が大きく引き伸ばしてみて、これはアダムスキー型ではないか!ということでした」

**石**「色はどうでしたか? 光沢を出していませんでしたか?」

**津**「最初はカラスのように黒い物体でしたが、ファインダーをはずして肉眼で見たところ、太陽のような明るい金色の光をピカーッピカーッと信号を送るように時々放っていました」

**石**「肉眼で見た円盤との距離はどれくらいですか?」

**津**「おおよそ百メートルくらいです」

**石**「そんなに遠くないですね?」

**津**「そうですね」

**石**「UFOに関係して、何か夢などを見たことがありますか?」

**津**「はい。あの目撃した三日後、月の夢を見ました」

**石**「どういう内容ですか?」

**津**「自分が月の上空にいまして下の方をのぞき込んでいるんです。そうしたら、人工のトンネルと基地がありました」

**石**「津田さんは今後、UFO写真の撮影を続けて行きますか?」

**津**「もちろんです!」

**石**「円盤に興味を持ったのはいつ頃ですか?」

**津**「小さい時は、よく円盤円盤と言って騒いでいたんですが、この間までずーっと忘れていました」

**石**「先ほどお聞きするのを忘れてましたが目撃された方角と位置を教えて頂けますか」

**津**「えーっと、最初家の裏にあたります東の方角から飛んで来ました。父も写真の専門家で、あとで調べてくれたんですが、写真では北四十三度四十五分四十秒、そして東は百四十二度二十二分二十五・五秒の位置です」

**石**「どうもありがとうございます。それだけ詳しければ良く解ります。それで、話が前後するんですが、円盤が飛んでいることを確認できた時間の長さはどれくらいですか? それと速度と音についても知りたいのですが」

**津**「飛んでいた時間の長さは約二十秒くらいだと思います。速度は最初ゆっくりでしたが、カメラに撮影し終えると雲の中にスーッと消えるように見えなくなりました。それから音は全くしませんでした」

**石**「ほかに気がついたことはありませんか?」

**津**「とくに、これといったことはありません」

**石**「これから夏に向けて、この辺ですと静かで民家も少ないし、UFO観測には最高ですね」

**津**「ええ、まあ」

**石**「今晩は素晴らしい体験をお聞かせ頂いて本当にありがとうございました。それと、私達の機関誌には原稿だけでなく写真も掲載したいと考えておりますのでご協力下さいますでしょうか」

**津**「はい、よろしいですよ」

# 沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る！

## そして後日またも強烈に輝く光体が現れた――

▲新里義雄氏

**去る五月三日、沖縄市で開催されたGAP沖縄支部大会の日、昼食休憩時間に沖縄市の会員・新里義雄氏と関高明氏が会場付属のベランダより遠い空中に葉巻型母船とおぼしきUFOが出現したのを目撃した。しかも新里氏は後日再度自宅から夜空を移動する強烈な光体を目撃することによって懐疑的であった三日の葉巻型物体が母船であったことを確信するに至ったという。新里氏はきわめて純粋かつ熱心な会員で、昨年のアメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅にも参加された方。氏の誠意ある人柄は多数参加者の認めるところである。以下の氏の手記はかなり長文のために最初のあたりをカットしたことを了承されたい。**

葉巻型母船の目撃報告が遅れましたが、その理由は、あれ以後に素晴らしい事が起こったからです。

大会の当日、昼の休憩時間中、関さんと私は満天の曇り空を眺め渡しておりました。その時私は習慣的にそうしていただけで、別にこれといった意識的な目的はなかったと思います。

上空全体は濃密な雲と希薄な雲で満たされていました。青空は全く見えません。私達の立っている地点から北西の方角約一キロと目測されるあたりに小高い住宅地域があり、その中程にキリスト教会と思われる建物の尖塔があります。あたりの建物にくらべてこの様式の建物は目立ちます。私はその姿にひかれて視線はその方向の遥か彼方の空間に集中しておりました。

しばらくしてその尖塔の右斜の上方約十度、尖塔との間は約十～十五センチ位の地点を、私達の立っている位置から延長した線上のはるか彼方に、明らかに雲ではない物体が静止しているのに気づきました。その物体は幅も長さも紙巻きタバコを黒く染めたようなものでした。

しばらく凝視して確かに雲ではないと思いましたので、「あれは何だ？」と言って物体の方向を関さんに示し、尖塔との位置関係を説明しながら早目に確認させようとせきたてました。少々焦りながら彼の確認を待っていると、まもなく彼も「あっ！」と叫びましたので、「見えたかい？」と聞くと「見えた」と言います。

その瞬間、物体は静止状態から上昇を始め、約五～六秒後には手前上方にあった大きな濃密な雲の彼方へ消えてしまいました＝図1。

このときは「それらしい」と思っただけで、間違いないという確信は実のところありませんでした。あれが本当に母船であったのなら、なぜもっと近距離に現れてはっきりした姿を見せてくれなかったのだろうと、いささか疑問視していたため、この報告が遅れた次第です。大会のあとのパーティーでは司会者の方の突然の紹介があったためにやむなく目撃したことを発表しましたけれども、やはり翌日から疑問が起こり始めました。その理由は物体が垂直に静止していたことにあります。母船が垂直な状態で静止することがあり得るだろうか（編者注＝あり得る）、早まってパーティーで発表したことはGAPの皆さま方にたいして誠実さを欠くことになるのではあるまいか、などと一人であれこれと考え続けておりました。

### また強烈な光体が出現！

ところがこんな状態にあった私の想念に応えるかのように、再度UFOが出現したのです！　しかも今度は迫力も意識的フィーリングも満ちていました。これにより、三日の母船は土星の母船であったという強い確信もわき起こったのです。

目撃しましたのは五月二十五日の早朝四時三十分から三十九分の間で、空は快晴でした。その前日の夕方、私は自室でイスに腰かけて体を休めておりました。そのときにふっと思いついたことは、今日から生活のパターンの一部を変えようということだったのですが、その理由は省略します。

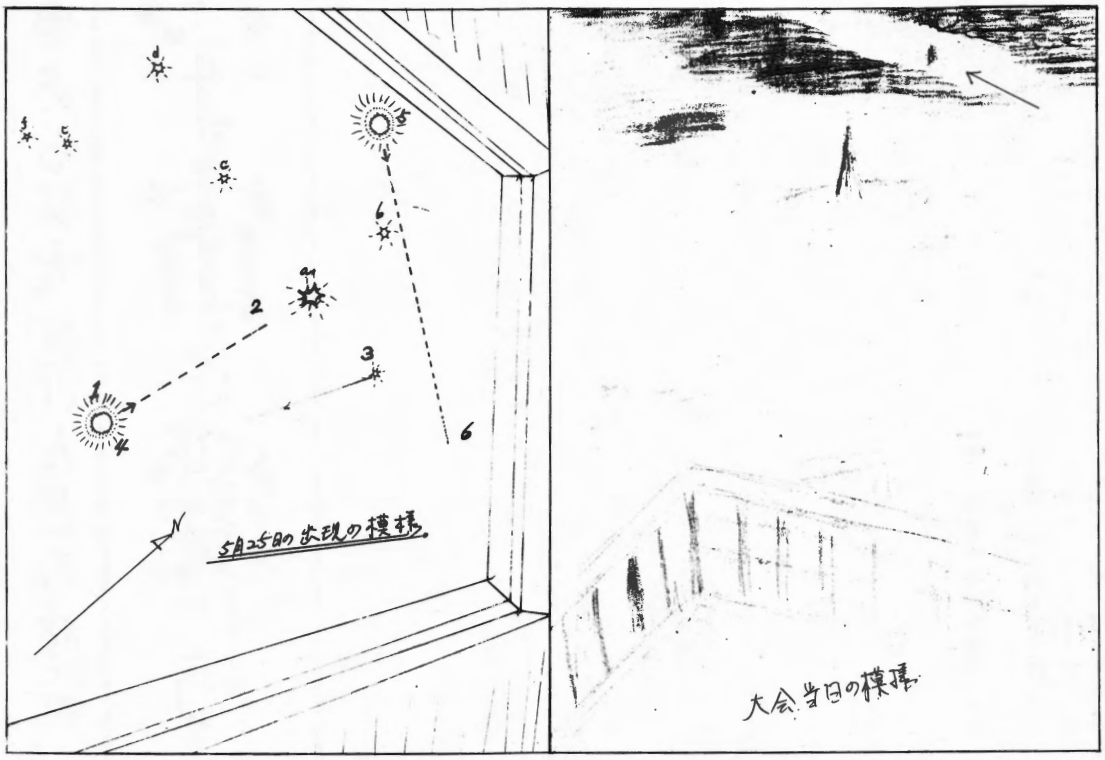
（編者注＝新里氏は宮古島のご家族と別居し、単身沖縄市で働いておられる）

とにかく今迄のように夜遅くから睡眠をとるのではなく、仕事から帰って食事などを済ませてから考え事をするのではなく、まず睡眠をとって体を休めることにしようと考えたのです。

そこで早速気分転換に部屋の模様替えをし、ベッドの位置も今迄よりはもっと広く星空の見える窓際に移しました。余談になりますが、この夏になってから窓をあけっぱなしで星を見ながらいつのまにか眠ってしまうのが私の習慣になっていて、たぶんそのせいか私の視力は〇・四から一・〇まで回復しています。

その日も私は星を見ながら、三日の件の報告をどうすべきかと考えたり、想いを偉大なスペース・ブラザーズに馳せたりしながら眠りにおちいりました。「地球上では私達の宇宙船が星の輝きのように見えるでしょう」という彼らの言葉を考えながら――。この言葉は数日前から気になっていたのです。

翌日は早いどころか真夜中に目が覚めて、時計の針は午前一時を指しています。気分は良好でした。洗面をすませ、コーヒーを作って飲んだ後、またベッドに横になって『宇宙からの訪問者』を熟考しながら読んだ後、空の一角に視線を向けて、彼らが母船や円盤内で活動する姿を想像しながら星々を見ておりました。目覚めてからこの時まで何時間経過したかはわかりません。




▲図2　▲図1

突然、私の想念を中止させるように、宇宙船が出現したのです！　それは図2の(1)のあたりから(2)の方向へ意識的に移動する輝きとなって出現しました（傍点は筆者による）。その時までその物体がそこにあったというのではなく、突然に輝きが移動を始めたのです。この宇宙船の輝きは星(a)よりも少し大きい程度で、図には星の大きさや輝き具合も、そして宇宙船のそれも、肉眼に映ったように出来るだけ正確に描いてあります。

その瞬間の私の喜びと安心感がわかって頂けますでしょうか！　この時、三日のパーティーでの発表についての私の疑問のすべては吹き飛んでしまったのです。その宇宙船の輝く光線は私の顔面にもかすかに届いたのではないかと思います。それはまさに宇宙船の輝き、目的ある輝き、人間による輝き、憧(ひとが)の輝き、そして驚異の輝きでした！　伝わりますでしょうか、その瞬間の私の感激と安心感が！

やった！　現れた！　私は驚異とも感激ともつかぬ興奮に包まれながら、もっとはっきり肉眼で捕えようと急いでベッドから飛び出し、部屋の灯りを消して、メガネをかけると再度その方角へ視線を向けました。ところがすでにそこには宇宙船の動きはなく、それの移動した距離と思えるあたりに星(a)が輝いています。瞬間、この星を静止した宇宙船とばかり思い込んで凝視して待ちました。その前に図の(3)から(4)まで流星らしき光体が一瞬に移動したことを記憶しています。

しばらくしてから、いま凝視している物体が星であることに気づいたのですが、この光体は一向に動きを見せません。そういえば宇宙船の輝きが始まって(2)のあたりまで移動していた時、星(a)の位置には薄い白い雲があって左の方向へ流れていたような気もする。たぶんこの星はその雲に隠れていたので私は気づいていなかったのだろう。灯りなど消そうとしなくてもよかった、メガネなどかけようとしなくてもよかったのに無駄なことをしたもんだと思いましたが、同時に、これだけで終りではないという強い感じもあって、期待しながらそのあたりを凝視し続けておりました。

案の定、同じ宇宙船が再度出現したのです！　その時、思わず私は「あーっ！」と感激の叫び声を発しておりました。この時も図の(5)のあたりから移動する輝きで始まりました。それは大きな輝きで始まり、数秒後にはしだいに遠ざかって(6)のあたりでは肉眼ではほとんど確認できない程になったのですが、その時更に強い印象を受けたのは、どうやらその宇宙船はもう一つのかすかな光体と合流あるいはたわむれるように交差したように見えたことです。

興奮からさめぬまま我に返って薄明りの中で時計に目をやると、針は午前四時三十九分を指しておりました。最初の出現から約十分位経過していたと思います。今回のそれには強烈な意志表示が感じられました。確証を与えてくれたのです。そして大会当日の出現と今度の出現には関連があると感じている私は、あれが土星の母船であったと確信しております。

●ある偉大な哲人との対話

# 宇宙と愛について

〈連載第二回〉 久保田八郎編

（前号からの続き）

「あなたはマジックミラーというものを知っていますか。ある方向から見るとその鏡の中を見ることができます。ところが反対側から見るとそれは普通の鏡であって透き通して見ることはできません。そのマジックミラーをここに置いたとしましょう。それは巨大な鏡で、高さと幅は一万メートルあるとします。それが私とあなたの間に立ててあるとしますと、私の側からはこれを透してあなたが瞬時に見えますが、あなたの側からは一万メートルの高さを越えて降りて来ないと私を見ることはできません。

空飛ぶ円盤といわれるものは別に不思議な物ではないんですが、このミラーのこちら側にいるんです。だから瞬時にして空間を進行しますけれども、地球人は反対側から見ているために、それが破れないんです。これは光という鏡を破ることのできる側と破れない側との違いなのです。

いま車の運転免許証を持っている人が東京から大阪までを五時間で走ったとしましょう。ところが運転免許証も車もない人は歩くとしますと、ずいぶん時間がかかることになります。そこで徒歩の人は車で行く人のことを評して「なぜあの人はあんなに早く行くのだろう」と不思議がったとします。しかしこれは無理な話で、両方が相容れないのです。

## 『愛』がすべてを可能にする

この相容れない両者を一体化せしめるには、振り出しに戻りますが、『愛』しかないんです。『愛』がそれを可能ならしめるんです。車のない、お金のない人が、車を持つ人に「乗せて下さい」と頼んで乗せてもらえば、同じ時間で到着できます。そのときは『愛』が芽生えないとだめで、『愛』と『愛』との出会いによって可能になるのです。

いま地球人といわれる私たちと、あれほどに多くの写真に撮られているUFOといわれるものとのあいだには、「乗せて下さい」「ああ、乗せてあげよう」という『愛』がありません。その『愛』が芽生えたときにすべてが解決します。

私たちはいま牛を家畜として子供の頃から教育されています。しかしずっと昔はそれは家畜ではなくて二本のツノを持つ猛獣でした。しかしいま牛を見れば、「ああ乳牛だ」と言ったりします。もう恐怖は存在しません。犬にしても野性のままで人間を襲ったりするとこわい存在ですけれども、それを飼ってクサリでつないでおきますと人間に慣れて可愛くなります。そうなると愛犬となって、『愛』がつくのです。同じ犬でも大きな差が出てきます。

人間も同じで、同じような別々な惑星に住みながら、やはり差があります。うまくゆかないのです。

私はよくヤクザとつきあいますので、人から「だめだ」といって笑われるのですが、私の方から言いたくなります。「なぜヤクザとつきあったらだめなのか。全く同じ人間ではないか」と。彼らは本当は優しい人間なのです。職業はヤクザであっても暴力団であっても、彼らと私とのあいだには『愛』があるのです。相手には私の『愛』がわかるのです。『愛』

によってすべてが帳消しになるのですが、人々は偏見をもった見方をするからややこしくなるのです。

## 地球人はなぜUFOを避けるのか

UFOの場合、あれほどに多くの写真という動かぬ証拠が出ていても一般人が認めようとしないのは、地球人のなかにこれを異端視する要因があるからです。相容れないものを自分からつくり出しているのです。犬のそばへ、犬のきらいな人が近寄れば吠えたてますが、犬の好きな人が近寄れば尻尾を振って喜びます。これはテレパシーによって犬に嗅ぎとられるわけですね。UFOの場合も同じで、人間によって嗅ぎとられるのです」

――そうしますと、非常に進化した別な惑星の人は精神的にすごく進歩して、愛の問題などはもうはるかに解決しているわけですね。

「解決していても、『愛』がわかっていても、機会、意志というようなものが存在しなければ、相手は路傍の人にすぎません。前にも言いましたように、『愛』がいかにわかっていても自分だけのものならば、それは『愛』ではなくて『恋』なのです。相手に意志伝達できてこそ、『愛』に変わります。だからどんなに高度に『愛』が発達しても、チャンスがなかったら『愛』が芽生えないんです。いずれは地球人が「ずっと前からあなた方が好きでしたよ」と言い、異星人も「うん、ぼくもきみたちが好きだったんだ」と言って手を取り合って喜ぶ時が来ると思いますけれど、今は意識して疎遠になっているんです。

だけど地球人は異星人にしょっちゅう会っているんですよ。世界中で数百枚というUFO写真が撮られているんですからね。瞬時にして去って行くUFOを撮影するチャンスは万に一件しかないと思いますが、それを年間に多数写したり目撃したりするのですから、目撃されなかったUFOの数はもっとぼう大なものになるでしょうね。それなのに地球人はそれを意識して避けているのです。たとえばいま屋外を自動車が沢山走っていますが、自動車の方からこの部屋の中へは入って来ません。それを目撃しようと思えば私たちが外へ出て見るという努力をしなくてはなりません。

## 数万人の人を覚えている！

だから『愛』というのは無尽蔵に存在しながらも成立しないことが沢山あるわけです。

これからもUFOというものは多くの写真に撮られるでしょうが、意志の疎通という面ではまだだめですね。

それでも変化があります。だから大丈夫です。たとえばリンゴの木を見て、きれいだな、と言って眺めるのは『愛』ですし、リンゴの実をとって、おいしいなと言って食べるのも『愛』です。だから変化というものがあります。

私がそのリンゴに『愛』をもっているとしても、そのリンゴの木を生やしている家の人は見なれてしまって『愛』をもちません。あまり同じ物を見なれると、その物が存在しなくなります。

しかし私は一度見たリンゴを必ず覚えておいて、後日それを思い出して、「ああ、あのリンゴの木はどうしたかな」と考えたりします。こうした人間の記憶というものは素晴らしいですね。

私自身はどこの家へ行っても、だれに会っても、それを完全に覚えておきます。それが私のつとめです。そして相手が困ったときに私に救いを求められたら、初めてそれが鮮明に浮かび上がって現実化して、たとえどんなに距離があっても、年月を経過していても、相手を助けることができるのです。私が無感覚だったら人を助けることはできません」

――そうしますと、いったい何人ぐらいの人を覚えていらっしゃいますか。

「おかげさまで数万人の人を覚えています（注＝これは住所、氏名ばかりではなく、個々の人の顔つき、体格、病状など、すべてを記憶していることを意味する！）。だから何人の人が来てもこんがらかることはありません。なぜかといいますと、私に情熱があるからです。他人にたいする情熱です。その情熱とは何度も言った『愛』なのです。

すべてが『愛』にもどってゆき、いつも『愛』を生み出すようにする必要があります。停止したらだめです。私はおかげさまで、いつも強烈に鮮明に、私の知る限りの人にむかって『愛』を送っています。私はコンピューターみたいな人間とも言えるでしょう。なぜなら私が知る限りの人（数万人の人）は私の内部に存在しているからです。暗記するとか意識するとかではなく、『存在』しているのです。

以前述べましたように、存在するということはすべてを包含しているのです。すべてを包含すると『無』になるんですが（注＝本誌前号を参照）、それと同じように、私自身はすべてを包含しているんです。だから『無』であると同時に、すべてが私の中に存在します。

毎日一万人の病人に電話をかけると大変なことになります。私はある面での教え子が別に三万人いますし、それ以外の交友関係者が沢山いますので、全部で私の知っている人は大変な数になります。そのすべてに電話をかけようとするとえらいことになります。しかしそのすべての人は私の内部に存在していますから、そのなかのだれかが私に電話をかけてきて、「もう私のことを忘れましたか？」と言うのを聞くと大変残念なのです。

「私はあなたのことを忘れるような安っぽい人間ではないよ」と言うんですがね。不思議だと思われるかもしれませんが、みんな私は覚えているんですよ。一度会った人を忘れることはありません。なぜかというと、みんな存在しているからです。覚える必要がないから大丈夫なのです。存在しているものについては覚える必要がないんです。

## 『存在』の意義

つまらない表現かもしれませんが『存在している』ということはどうしようも

ないことなんです。たとえば私たちが今座っているタタミをだれもが意識しているかというと、そうでもないんです。それはタタミがその上に座っている人間にたいして存在しているからです。女性が自分のはいているパンティーを意識しているかといいますと、意識しないのが普通です。それはパンティーが存在しているからです。物体があまりにも正確に存在していると人間は意識しません。存在とはそんなものです。空気を吸っていることにも人間は気づきません。それは空気がいつも存在しているからです。それで意識しないんです。

私は電話によって病人を治療することさえありますが、それを人は遠隔治療というかもしれません。実際には相手の肉体は私とは遠く離れていますけれども、相手は私の内部に存在しているのです。離れてはいないんです。しかし相手は行動します。別な場所で――。だけど相手は私の中に存在しています。だから至って簡単なことです。

私が治療する人の一万人の個々の住所氏名や顔つきから病状まで全部知っているというと、「大変なことだ！」と人は驚きますが、私にとっては全然そんなことはありません。だれでも私と同じことがやれると思います。あなたでもやれるでしょう。あらゆるものを自分の中に存在させればよいのです。

学生が何かの学科を学ぶ場合は、頭の先で覚えようとします。別な物として扱うわけです。私の場合はそれを存在させるのです。存在するのですから一回だけ読めばよいのです。たとえばだれかがここに来て座ろうとする場合、そのたびに「存在、存在」ととなえる必要はありません。ただ一回だけだまって座ればそれは存在となります。次の変化までは一回だけでよいのです。

ところが人間は『存在』ということを考えないで、覚えようとするわけです。何かを何度覚えようとしても覚えられないという人は、その人の中に対象が存在していないんです。あくまでも覚えようとしているだけで、血肉にしないんです」――そうしますと、何かを覚えようとする場合は、その物を自分の中に存在させればよいのですか。

「そうです」

――存在させるためには、具体的にはどうすればよいのですか。

「その答えにはちょっと困りますね。私にとっては、すべてが存在そのものですから――。これはむずかしいことですね」

――存在させる秘訣がわかれば、どんな学問でもマスターできることになりますか。

「自分という字を見ますと、これは自(みずか)らを分けると書きます。つまり分かれている自分があるわけです。だから自分というものが方々にバラまいてあると考えてよいでしょう。そうすると万物すなわち宇宙が自分なのです。このことをむつかしく考える必要はありません。あらゆる物が自分そのものです。そのなかで必要な物だけを取り入れて用います。

そこで同じ存在でも、今必要な物と、そうでない物とがあるわけです。ここに掃除機があるとして、これがいつも作動しているかというと、そうではありません。掃除機は存在していますし、その機能も存在していますが、しかしそれがいま作動しているかというと、そうではありません。働かないという状態も存在します。両方を包含しています。

そこで、ものを覚えるのにどうするかというと、必要な事だけを覚えるんです。取り入れておくんです。そのあとは自分なのだけれど、同じ存在なのだけれども、必要と不必要とは同時に存在しているのだと思うんです。必要なものと必要でないものは同時に存在しているんです。これは間違いないことです。どっちも自分なのですが、必要なものだけこちらへ取り入れておく存在と、そうでない存在とがあります。どちらも自分なのですが、強いて言えば、そういうふうに分けることができます。そうすればおのずから覚えることになるんです。

私の場合は、「二十分ほど眠るよ」と言って寝ると二十分だけ眠るし、「四十分だけ眠るよ」と言って横になると四十分だけ眠ります。それ以上でも以下でもだめで、確実に二十分または四十分だけ眠ります。つまり二十分という時間が存在したわけです。睡眠というものも存在したわけです。

## 睡眠しながら安全運転！

私はときどき車を運転しますが、家内が「あなた一人のときはいいけれど、人様を乗せて、眠たくなったら車を停めてから眠りなさい。あなた一人のときは運転中に眠るのもかまいませんよ」と言います。これはわけのわからぬ話のように聞こえるでしょう。

私の場合は、運転も睡眠も同時に存在している人間なのです。だから運転中に眠ることができるわけで、そのことが家内にはわかっているんです。ところが、そのことを知らない人を同乗させると、私が運転中に居眠りを始めると、「カーブ、カーブ！」と言って起こすのです。そこでその人を心配させてはいけないので車を停めて、いくらか睡眠をとりますが、私には運転と睡眠の両方が存在しているのですから、これはどうしようもありません。

あるとき女性二人と男一人を同乗させて、ある半島へドライブに出かけたことがあります。そのとき運転のできる者は私だけでした。そのうちの一人は私が居眠り運転をするものだから怖がったのですが、他の二人は私の特殊な能力を知っていますので、居眠りしながらでもいいから運転を続けてくれと言います。

そこで、「じゃ、私は眠りながら運転する。前方の車に〝セット〟しておくから心配するな」と言って、眠りながら運転を続けました。私という人間をよく知っている女性は全く意に介さずにいましたね。それは私が相手の中に存在していたからです。だから怖がりません。しかしM子という女性は私を外側から眺めているために、私がその人の中に存在していないんです。外部にしか存在していないんです。だから怖がるわけです。そこでM

子は心臓をドキドキさせて心配します。「心配するな」と私は眠りながら答えます。私は睡眠中でもものが言えるんです。しゃべるということと眠るということもやはり私の中に存在しているからです。だから私が睡眠中にそばから質問されてもちゃんと答えるんです。そこでM子は「なんだ、先生、起きてたの」と言いますが、実際は運転と睡眠と発言とはすべて私の中に存在していますから、眠りながら安全運転して、しかもしゃべるわけです。それでM子は頭がおかしくなるのです。

私の肉体は疲れ果てて、だらしない格好で頭を背もたれにもたれかけて、イビキをかきながら、手はハンドルを操作してきちんと運転しています。睡眠と運転と発言以外に理解というものも存在しています。他の人たちは耳で言葉が聞こえないとだめですから、私が眠り込んだらいけないんですが、私は存在しているから聴かなくてもいいのです。耳で聴いて理解する必要はありません。だから眠っていてもよいわけです。しかしM子があまり心配するものだから、やがて目をあけて運転しましたがね。

## 前方の車に〝セット〟する

睡眠しながら運転するときは、あらかじめ前方を走る車に想念をセットしておくのです。そうするとその車がスピードを八十キロにしたときはこちらも八十キロになり五十キロに落としたときは、こちらの車も五十キロになります。先方がカーブする方向にこちらの車もカーブします。これは最も安全な運転法です。車間距離も最初にセットしておいたら、そのとおりに走ります。これはコンピューターにあやつられる模型と同じです。これも『存在』です。

困るのは、前方の車が私たちの目的地以外の場所へ行くと、こちらの車もそれに従って、とんでもない方向へ行くことになります。そこでこちらから「あなたはどこまで行くのですか?」とあらかじめ発信しておくのです。すると前方の車の運転手はそれに感応して「××市はまだかな」と思いますから、それをこちらはキャッチして、「××市へ行きたがってるぞ。これは私たちと同じ方向だ。よしこの車にセットしておこう」ということになるわけです。いわば前方の車の運転手の想念によって、こちらの車を動かすのです。

何度もそんな経験があるもんですから、私とよく一緒に車に乗るN子は怖がりません。なぜかといえば、本人の中に私が存在しているからです。一方M子の場合は私のかわりに心配や不安が存在し、私は外部に存在しています。

## 不変の常理

だから皆さん方がものを覚えるときに、自分の中に取り入れるべき存在と取り入れない存在とがあることになります。

ここにあるコップの働きは、飲まないということと飲むということと両方の機能をそなえて存在しています。いまこうして私が水を飲むと、「飲まれた」という存在になります。そして水が中にあるという状態ばかりでなく、水がなくなるという状態をも含めて存在しています。

何かを覚える場合に、ある存在をどのように位置づけるかということは大変なテーマですね。覚えるということにはやはり『愛』が必要です。それは強烈なパワーといってもよいでしょう。知らないまにそのパワーが発揮されるときと意識して発揮されるときがあります。

以上お話ししたことは簡単な事なのですが、その簡単な事を説明するというのはむつかしいですね。太陽が沈んで外が暗くなったということを説明するとなると大変むつかしいことです。

とにかく覚えるという厄介なことをしないんです。覚えるのではなくて、存在するんです。だれしも存在ということがもっとわかってくると、すごい存在になるんです。「存在とは何か?」と聞かれると、それは『変化』なのです。そして『変化』とは『愛』です。「愛とは何か?」それは『結合するエネルギー』です。

『変化』なくして何物も存在しません。録音テープの働きは何かというと、それはテープが動くことです。それが存在価値です。ここにあるガラスコップは水やジュースその他の飲みものを入れて飲むために存在しますが、からっぽとしての存在にもなり、割れるということも存在しています。そのように変化します。だから存在とは変化です。変化とは『愛』です。

私は『不変の常理』という言葉をつくっていますが、これは常に変わり続けるということは、永遠に変わることのできない真理であるという意味です。

カセットテープは動いた、時は過ぎ去ってゆく、ボールペンは動いた、人間が首を振った、呼吸をした、こういう現象は、つまりこういう変わり方は永遠に変わらないでしょう。変わらないということはあり得ないけれど、変わるということはあり得るのです。それだけはいつの世になっても間違いないことです。

あらゆる物が常に変わるのです。これが永遠に変わらない真理です。だけど取り入れてしまうと、それ自体が変わっても変わらなくても変化はありません。親からもらった鼻は、別物のように見えても親の鼻と同じものです。

だから私の場合はいちいち覚えることをしないで、すべて存在にしてしまうんです。覚えるという面倒なことはやりません」

（以下次号）

### 編者付記

地球人のレベルを超絶したこの哲人は数万人の人を個々に覚えたり、睡眠しながら車を運転するばかりではなく、他にも驚異的な治療能力を有する偉大な方であるが、事情によりまだ氏名は公開できない。いずれこの方の伝記を著す予定なので、そのときに全貌が洩らされる筈である。なお両耳の鼓膜を除去したこの方は医学的に聴力はないにもかかわらず会話においては他人の音声を常に完全なテレパシーで聴き取っているという事実を付け加えておこう。

「沖縄支部大会と南国の旅」紀行

# 波よ静まれ、そして風も

●久保田八郎

*Waves, be still, and be quiet the wind!*

輝く紺碧の空と海——
ハイビスカスの咲き乱れる
亜熱帯の島に鎮魂の挽歌よ響け

昨年七月日本GAP沖縄支部が結成されて以来の懸案であった第一回支部大会がいよいよ開催されることになって、ご招待下さった支部の方々に感謝しつつ昨年来の準備と調整を経て勇躍日航機に搭乗したのは五月二日午前十一時半頃だった。参加者十八名に旅行社の添乗員・田中正氏と私を加えて総勢二十名が羽田空港より十一時五十分にジャンボ機で飛び立ったが、連休のこととて空港が大混雑すると予想していたのに案外そうでもないので落ち着いて機内におさまった。沖縄は国内だが、なにせ初めて行く遠い南国なので、飛行時間二時間二十分とはいえ海外旅行の気分が横溢して小学生の遠足のような愉悦感がわき起こってくる。

特に今回は田中義則、野本俊次の両君のごとき愉快な人物が絶えずジョークをとばしては一同を笑わせるので、ずいぶん賑やかである。その他の方々も屈託なく笑いさざめいていた。実に楽しい雰囲気だ。

## 雨の空港での懐かしい出会い

午後二時十分に那覇空港へ着陸した機内から窓越しに外を見ると、なんと雨が降っているではないか。せっかくの沖縄訪問が雨でたたられるとは——。いや、必ず晴れる、晴れさせてみせる、と心中で強くイメージを描きながら空港のロビーへ出ると、沖縄支部の宮城代表、稲嶺、新里、喜屋武の各氏やその他の方々がシンボルマークの旗をかかげて迎えに来ておられた。宮城氏と新里氏以外は初対面の方々ばかりだが、初めて会ったような気がしない。これはGAP会員同士で体験する特有のフィーリングなのだ。一足先に鹿児島から船で来た熊本支部の首藤、島津の両君にも会う。

空港からは二十六名乗りの小型バスに乗り込み、荷物を積み込んだ二台の乗用車と共に夕方までの時間を利用して早速観光に出発した。目指すは南部戦跡と玉泉洞と呼ばれる大鐘乳洞である。バスが走り出した頃から奇跡的に雨があがって薄日のさす好天に変わってきた。

## 地獄の大沖縄戦

沖縄といえば何といっても悲惨な大戦争に触れないわけにはゆかない。太平洋戦争末期の昭和二十年三月下旬から沖縄

へ来襲した米軍を主軸とする連合軍機動部隊の艦船千数百隻と五十四万の兵力を迎撃した日本軍十一万は、約三カ月にわたって沖縄全島で世にも凄絶な死闘を続けた後、六月二十三日に牛島第三十二軍司令官、長参謀長らが自決して実質的な沖縄の大激戦は終了したのだが、これによる戦死者は日本兵（陸海共）六万五千人、沖縄出身の軍属二万八千人、その他の戦闘参加者五万五千人、一般人九万四千人、計二十四万二千人にのぼり、米軍戦死者一万二千五百人を加えると実に二十五万人を超える驚くべき多数の人命がこの島で失われたのである。これは世界戦史上例のないことで、しかも無辜の地元民までが巻き込まれた上、その戦死者数が正規軍を上まわったという例も他にない。ある意味では広島・長崎の原爆以上の恐るべき戦争であったと言えるだろう。しかも中等学校の男女生徒多数が学徒兵として軍に協力させられて信じられないほどの悲惨な最期をとげているのだ。そのなかに名高い『ひめゆり部隊』があった。

▲那覇空港にて。左方のメガネが稲嶺氏。

この『ひめゆり部隊』なるものは戦後映画や小説などで脚光をあびて有名になったけれども、多分に真実が歪められ、美化されていると語ったのは、私たちのバスに同乗してガイド役をつとめて下さった沖縄支部会員・比嘉敏夫氏である。

比嘉氏は沖縄の大攻防戦の当時、十四歳の少年として戦場を彷徨し、眼を覆わしむるような実態を目撃された方なので、その説明は歴史の生き証人として甚だ貴重なものであった。回想すれば沖縄戦は涙なくして語れないと言われる氏の話こそ涙なくして聞くことのできない悲痛な物語であって、物凄い惨禍にあらためて慄然とし、予想以上の実態に大きなショックを受けたのである。

## ひめゆり部隊の真相

昭和十九年十月十日、米軍機動部隊による沖縄大空襲の結果、那覇市は灰燼に帰した。以来沖縄は臨戦態勢に入り、防衛軍たる第三十二軍は現地第二次防衛召集を実施し、満十七歳から四十五歳までの健全な県民男子のほとんどを軍に召集した。翌二十年の二月三日には沖縄県下の学徒動員が強化され、通信・観測・看護などの特別訓練が実施された。

こうして各中等学校の男女生徒たちが続々と軍のもとに馳せ参じて、男子生徒は鉄血勤皇隊その他の隊を編成し、陸軍部隊に配属されたが、女生徒のほとんどは看護要員として陸軍野戦病院に配置された。これは三月下旬のことで、同月二十三日に沖縄県立第二高女（高等女学校）の生徒が第二十四師団第一野戦病院（山三四八六部隊）へ入隊、二十五日に県立第一高女生が南風原の野戦病院（球一八八〇三部隊）に入隊、二十六日には県立第三高女生が特志看護婦として北部各部隊に所属、二十七日には県立首里高女生（瑞泉部隊）が従軍看護婦として石五三二五部隊に入隊、二十八日に私立昭和高女生（梯梧部隊）が従軍看護婦として第六十二師団（石五三二五部隊）に所属、そして二十九日には沖縄師範学校（注＝旧制の小学校教員養成学校）の女子部生徒が南風原の陸軍野戦病院に入隊、三十一日には私立積徳高女生が従軍看護婦として第二十四師団（山三四八六部隊）に入隊した。いずれも十六歳から二十歳までの少女である。

▲バスの中で説明する比嘉氏（左端）

世に知られる『ひめゆり部隊』というのは、右の各隊の内、軍命により南風原の野戦病院に看護要員として入隊した県立第一高女生と師範学校女子部生徒職員計二百九十七名の通称である。この内、南部各地で戦死した職員十六名、女生徒百九十四名、計二百十名を合祀した慰霊塔が『ひめゆりの塔』であり、これは野戦病院第三外科の軍医、衛生兵、正規看護婦、炊事婦と共に戦死した摩文仁村伊原の地下洞窟の上に建立されている。

五月二十五日頃、米軍の猛攻を受けたこの野戦病院は独歩兵（歩ける兵）や女生徒の特志看護婦の一隊と共に約十キロ南下して右の天然洞窟の中に移動した。しかしここも米軍に包囲されたので六月十八日に野戦病院はついに女生徒たちに解散命令を出した。第一外科と第二外科所属の女生徒たちは十九日の午前三時頃に各洞窟から脱出に成功したが（あとで多数の戦死者が出た）、伊原の第三外科は前夜、洞窟内で分散会を開催したので、（このとき女生徒たちは学校の制服に着替えて胸に校章をつけた）、十九日未明を予定していたために二～三時間の差で機を逸し、脱出直前に米軍によりガス弾を撃ち込まれて悲壮な最期をとげたのである。ただし四十名いた『ひめゆり学園』の女生徒の内、五名だけは人事不省におちいった後、奇跡的に蘇生して助かった。したがって最後の様子は手記で残されて

いる。世上これがかなり伝説化して全員自決したと伝える向きもあるが、これは誤りである。しかし南部の喜屋武海岸に追いつめられて職員の平良氏と共に手榴弾で自決したひめゆり学園の女生徒十名がいる。

比嘉氏によると、実際に氏が目撃した女子学徒隊の人たちは（ひめゆり学園の女生徒ではなかったかもしれない）陸軍の軍服を着て軍靴をはき、断髪している人もあり、鉄カブトをかぶっていた。他の資料によると、衣服はボロボロになり、数十日も入浴しないために頭にはシラミがわき、顔は垢と汗にまみれて男女の区別がつかないほどのひどい姿になっていたという。そのような写真も残っている。

沖縄の女性は気丈なので、いざとなると男顔負けの強靭さを発揮する。あるとき米軍偵察機が飛来したので比嘉少年が飛び出たら「出るな、この馬鹿野郎！」と女学生から怒鳴られたという。戦争を全く知らぬ戦後世代の女優の演じる映画と違って、勇敢な娘子軍だったようだ。

また戦争中に第三外科所属の女子部隊を『ひめゆり部隊』と優美な名称で呼んだわけではなく、これは生き残った同窓生たちが終戦の翌年に戦死した同学の徒を弔うために現地に最初の小さな碑を建立してこれを『ひめゆりの塔』と名付けたのでそれ以来『ひめゆり部隊』と通称されるようになったのである。

『ひめゆり』の由来は次のとおりだ。戦前、那覇市安里に県立第一高女と県立沖縄師範学校女子部が同じ校舎内に同居していた。そして師範女子部は白百合をシンボルマークにし、第一高女は乙姫をシンボルにしていたので、その両方を組み合わせて両校を『姫百合学園』と呼んでいたのである。正式な学校名ではない。終戦とともに両校は廃校となり、現在は元の位置に『ひめゆり同窓会事務局』がある。

## 涙の『ひめゆりの塔』

私たちのバスは伊原部落の東三百メートルの位置にある『ひめゆりの塔』目指して進行した。ところがまた雨がひどく降り出して、そのうち豪雨と化した。道路に水が出て川みたいになり、バスは波を蹴立てて進行する。塔付近の十字路でバスをとめてから家の軒下に馳け込み、しばらく待つうちに小降りとなったので傘をさして参拝に出かけた。

二度目の建立になる大きな塔の正面には第三外科所属生徒を含むひめゆり学園出身の戦死した女生徒と教職員計二百十名の氏名がぎっしりと彫り込んであり、その表面を雨の雫が果てしもなく流れ落ちる。うら若くして国のために散った乙女たちの涙がその安らかな死顔を伝わっているかのようだ。万感胸にせまって佇立する。

この塔の左前に共に戦死した第三外科職員三十九名の小さな碑があり、塔の下には七十四名が戦死した洞窟があるのだが、今は入口が閉鎖されて中をのぞくことはできないという。もっと周辺を見学したかったけれども雨は降るし急いでもいたので、助手の松村君に写真を撮らせてバスの方へ引き返した。

▲ひめゆりの塔と筆者

比嘉氏によると、米軍は戦後この洞窟を『処女の洞窟』と呼んでいるという。

ここからほど遠からぬ国吉という所に『白梅の塔』というのが建立されている。ここも野戦病院に入隊した沖縄県立第二高女の生徒二十一名、卒業生五十三名、校長稲福全栄氏ほか職員十名、計八十四名が戦死した場所だが、こちらはバスのルートからはずれているせいか、あまり知られていない。私たちも時間の都合でここへは寄らなかった。

バスはやがて摩文仁の丘の戦跡国定公園へ登った。ここは沖縄戦最後の激戦地で、米軍艦砲射撃の砲弾が一坪あたり二十数発も炸裂して地形が変わるほどの凄まじい攻撃が加えられた場所である。今は美しく整備されて昔日の面影はない。各県が建立した慰霊塔が林立している。これは沖縄戦に全国各地の部隊出身の兵が参加したためだ。北海道の部隊の戦死者が最も多いという。

また摩文仁岳の下には沖縄師範学校の男子部生徒二百九十八名と職員十六名、計三百十四名の英霊を合祀した『健児の塔』がある。予科二年から本科三年までの十代の四百余名の生徒たちは鉄血勤皇師範隊を結成し、四月より軍の作戦に参加して、斬込隊、野戦築城隊その他の隊を編成したが、六月十九日、最後の突撃を敢行して四分の三が壮烈な戦死をとげたり壕内で自決したりした。勇猛なこの少年兵部隊も戦後に映画や戦記で有名になったけれども、私たちは雨と時間の関係でこの塔も見のがした。

こうした学徒兵部隊の活躍と壮絶な最期は他にも多くの例があるのだが、ここには書ききれない。

## 降雨は慈雨だった

私たちがバスの中から見た慰霊塔はごく一部分だけで、いまわしい雨だと思ったけれど、あとで聞くと、一同が到着するまでは昨年の九月から日照り続きで、沖縄は一日おきに断水の状態だったという。それが五月二日の大雨で助かったというのだから地元民にとってはまさに干天の慈雨だったわけで、私たちも四日間の滞在中に水不足で悩まされずにすんだのだ。考えると今度の旅行は最高度に天候に恵まれていた。

最後に付近の平和祈念資料館へ入った。ここには軍や住民の遺品その他の資料が

展示してある。米軍撮影の全倍程度に伸ばした膨大な戦争記録写真を見るうち、奥の一枚で釘付けになった。身にボロをまとい、右手で白旗をかかげて米軍に投降する十歳ぐらいの少女が、左手で顔を覆っている。降伏の恐怖からか、泣いているのか――。

ユージン・スミスばりのこの感動的な写真を見ていると、写真とは芸術ではなくて記録だということを痛感する。

## 厚情に満ちた歓迎夕食会

感傷と痛恨の渦巻くなかを南部戦跡をあとにして玉泉洞へ向かう。これは昭和四十二年に愛媛大学学術探険隊が発見した東洋一の大鐘乳洞で、四十万年を経たというだけあって無数の見事な鐘乳石が天井から垂れ下がっている。洞内の小川が雨で氾濫して奥へ入れぬため、私たちは出口の方から入って約百メートル見学しただけで外へ出た。

この隣に玉泉ハブ公園がある。中へ入ると、いるわ、いるわ、大小さまざまのおびただしい数のハブがのたうちまわっており、学術的な立派な資料館もある。ヘビもこうまで沢山いると恐怖感が起こらぬから妙だ。生きた大蛇を客の肩にからませたり、ハブとマングースの決闘ショーなどもあって楽しい場所だ。

ここを出たあたりから雨もあがってきたが時間が充分にないのでバスは喜屋武岬をまわらずに近道のハイウェーをつっ走って、夕刻七時半に沖縄市に隣接した具志川市の春日観光ホテルへ到着した。

ホテルの部屋は広くて立派で、これで一泊二食付六千五百円とは信じられぬほど安い。東京なら倍以上とられるだろう。

八時半から付近のレストラン『一和』で沖縄支部主催の歓迎夕食会に全員が招待を受けた。ビールがふんだんに出た上、食事も豪華版で、至れり尽くせりの温かいもてなしにすっかり恐縮し、心から感謝した。この費用はすべて沖縄支部持ちということだった。

## 支部大会の日に葉巻型母船が出現！

翌三日は支部大会である。全員正装してバスで九時半に出発して沖縄市の社会福祉センターへ向かう。会場は三階の中ホールで上等な部屋だ。ここで十時より五時まで大会が開催されたが、これは大成功だった。本土の会員はもちろん、沖縄支部の方々も大変熱心で、真剣かつ高次な雰囲気に満ちていた。最初に演壇に出た田中義則氏の講演が特によかったと思う。

昼食の休憩時間に新里氏と関氏の二人が空中高く葉巻型物体が飛ぶのを目撃したことがあとで判明した（**別掲十四頁の記事参照**）。

こちらで気づいたのは、沖縄の方々はいったいに穏和で純粋であり、本土人にたいしてきわめて親切であるということだ。沖縄人はベラベラしゃべらないという稲嶺氏の話は間違いなかった。復帰後の沖縄には本土から企業が進出して横柄な態度を示す人もいるらしく、これを沖縄方言で「ウチナー（沖縄）へ来るヤマトンチュ（本土人）のイバーヤー（威張り屋）」と言うそうだが、全島を歩いても私たちを白い眼で見る沖縄人は一人もいなかった。沖縄は異民族の支配を受け続けた痛ましい歴史のある島だけれども、ここには高次元な精神性が満ちている。後日知ったのだが、沖縄ほどに偏見や差別感を持たない地域は世界にないという。これは沖縄生まれの混血の人が一度アメリカへ渡っても大半はまた沖縄へ帰って来るという事実でわかるのである。素晴らしい土地だ。

夕方六時から近くの沖縄平安閣で立食形式のパーティーが盛大に開催された。料理は豊富で、きわめて良心的という印象を受けた。十時に終了後、約十名で小さいバーへ二次会に行き、一時頃ホテルへ帰った。

## 歴史の不可解さ

四日は北部の海洋博記念公園のビーチで海水浴を行うことになっているので好天を祈っていたところ、前日の雨模様の空とは打って変わって見事な快晴になったではないか！　あたった！　一同は欣喜雀躍して九時にバスで出発した。少し霞んではいるが空には一点の雲もない。

まず沖縄市に隣接した嘉手納米空軍基地へ行く。極東最大といわれるこの巨大な飛行場は、むかし北の読谷飛行基地と共に日本軍が地元住民を動員して建設したものだが、昭和二十年四月一日、嘉手納湾から上陸した米軍は全く日本軍の抵抗を受けることなく簡単に両飛行場を占領した。多数の戦闘機や施設をみずから破壊してこの基地を放棄した日本軍の真意は謎である。ここに放置された一人乗り小型特攻機『桜花』（人間ロケット）

▲生きた大蛇をかつぐ鈴木氏と千田氏。

▲沖縄支部大会（沖縄社会福祉センター）

は米兵の物笑いの種になったという。

広漠たる大飛行場から米空軍の最新鋭戦闘機がルーティーンで次々と飛び立って行く。大激戦の結果、敵の手中に帰した沖縄がその後日本に返還され、今は核兵器を装備した米軍に防衛されているという現実に歴史というものがわからなくなってくる。

一行は基地外の一角から双眼鏡などで内部を望見したあと、周辺をドライブして西海岸ぞいに北上、十時頃に万座毛に着いた。これは恩納村を左に入った位置に展開する広い芝生である。二百三十年前に琉球王朝の尚敬王がここを訪れて絶景に瞠目し、「万人を座らせるに足る」と言ったので万座毛と呼ばれるようになった。広さは数万坪あり、高さ数十メートルの断崖から海を見おろすと、東シナ海の透明な水が珊瑚礁を越えて岩壁に燦然と砕け散る＝**二十頁のタイトルバック写真**（筆者撮影）。エメラルドグリーンの海の色はメキシコのカンクンから見るカリブ海と同じだ。

▲万座毛にて

連休とあって大変な人出で、長い小道に観光客の延々たる行列が続く。

ある場所の崖っぷちでは沖縄の美しい民族衣装（琉装という）を着た三人の娘さんのモデルがいて、そのそばへ客を立たせ、客のカメラのシャッターを切るおばさんがいた。早速松村君と二人でモデルと並んで撮影をやってもらう。一回のシャッターの切り賃がモデル料込みで二百円。二人で写ると六百円だ。世の中には頭のよい人もいるものだと感心する。三百円でも押すな押すなの大繁盛だ。

## 沖縄は高級住宅の島

十時二十分にここをバスで出発して更に北上する。広漠たる砂糖キビ畑の中に見られる沖縄の民家は鉄筋コンクリート造りが多い。これは台風にたいする防衛策である。昔ながらの沖縄風の赤い屋根瓦の木造家屋がエキゾティックな印象を与えるけれども、台風が来るとひどい目にあうのだろう、今はちらほらと散在するだけだ。この風景はメキシコの田舎を思わせる。そういえば沖縄の都市はメキシコの地方都市に似たところがある。

この島に増加しつつある鉄筋コンクリートの民家には屋根の平らなモダンなのが多いから、これらの家の壁をすべて白く塗ればギリシアのエーゲ海沿岸のような美しい風景になり、世界的に有名になるのではないかと稲嶺氏に話したら、それはいいアイデアだ、新聞に投書してみようと言う。南国の紺碧の空と海に最高にマッチする民家の壁の色は白亜に限るのだが、まだ普及していないようだ。汚れが目立つのをきらうのかもしれない。いずれにせよ沖縄の民家の立派なこと、東京の下町に密集する貧弱不潔な木造家屋の比ではない。経済力が強くなったのか。

「ナーニ、見栄で建てるんですよ。よその家が鉄筋にしたからウチもそうしなくちゃというわけで、借金してでも強行するんです」と新里氏は答えていたが、これは謙遜して言っているのだろう。

▲琉装の女性と共に（筆者と松村君）

## 海洋博ビーチでの海水浴

バスは十二時半に海洋博記念公園に着いた。公園といっても広大な敷地にかつての海洋博当時の施設の大部分が残してあるから見所は沢山ある。

まず海の見える素敵なレストランで昼食をすませてから各会場を見てまわる。海上都市アクァポリスが海中に浮かび、水族館、沖縄館などがある。面白かったのはイルカの曲芸で、四頭のイルカが空中に飛び上がったりして〝名人芸〟を披露する。よく馴らしたものだ。

そのあと人工ビーチへ出た一行は水着に着替えて海水浴に打ち興じる。気温を計ってみるとセ氏二十七度。焼けつくような暑さでもないが、本土の五月上旬に比べるとかなり暑い。海パンを持たぬ私は海へ入らず、砂浜から双眼鏡で仲間を眺めたり望遠レンズで撮影したりする。

新婚らしい若いカップルが多い。本土からハネムーンに来るのだろう。戦争を全然知らぬ戦後世代の若夫婦が嬉々として砂浜や海中でたわむれている。平和と繁栄の象徴とみなせなくもない。これでいいのだろう。

五時にバスで出発して今度は今帰仁城跡へ行った。沖縄の地名は読み方がむつかしいので、その関係の資料をあらかじめ入手して予備知識を持っていないと恥をかく。

長い石段を登った小高い丘の頂上にある今帰仁城はむかし三代九十四年にわたって沖縄北部を支配していた北山王の居

▲海洋博ビーチにて

城だったが、五百四十年前に中山王尚巴志のスパイであった本部大腹によって滅ぼされた。現在は石積みや崩れた城壁が残る程度で、頂上から見ると山中に万里の長城に似た長い城壁が見える。城の前方に東シナ海が展開して眺望絶佳だ。今帰仁は美人の産地でもあるというが、あいにくそれらしい女性を見かけなかった。しかしこの土地の人々の人情は厚い。

ここを出てから夕闇せまるなかを東海岸側へまわり、嵐山展望台で少憩して羽地内海を遠望する。島々が夢のように浮かび、瀬戸内海を思わせる。

## エキゾティックな沖縄民謡

八時四十分にホテルへ帰着した一行は三階の大広間で夕食をとった後、十時にホテルを出て市内の『二見情話』というバーへ琉球舞踊を見に出かけた。男二人、女二人の計四名から成るチームは舞踊というよりも民謡が専門で、左端の美人がカスタネットに似たサンバという黒い木製の打楽器を持って鳴らし、その右にギターを弾く男性、続いて三味線（本土では蛇皮線というが、この呼称はよくない。あくまでも三味線である）を弾奏する男性、太鼓を叩く小柄な女性という順でステージに並んで、各自楽器を演奏しながら歌うのである。世界の民族音楽に深い関心を持ち、かねてから沖縄民謡の本場ものを聴きたいと念願していた私は燃えるような好奇心をもって耳を傾けた。

なかなかの名演だが、ある程度現代風にアレンジしているらしい。特にギターを見たときは少々失望したけれども本土から来る若い観光客相手ではやむを得ないのだろう。しかし沖縄の民族音楽特有のメロディーに堪能した。ビール一本で七百円だが、一時間半にわたる大熱演を聴いての上だから安いものだ。結局一人あたりの料金は千円だった。右端の小柄な女性の太鼓の演奏が素晴らしい。これほどの女の打ち手はざらにいないだろう。

沖縄の民謡の音階は私が判断する限りド→ミ→ファ→ソ→シ→ドが基調となり、レ音とラ音が少ない。特にソ→シ→ドと上昇する旋律が主に用いられ、これが沖縄独特のエキゾティシズム（異国情緒）をかもし出すのである。短調の曲の多い哀愁を帯びた本土の民謡とはまるで異なる陽気な牧歌的な音楽で、様式は違うがギリシアの明るい民謡と一脈通じるものがある。

## 安里屋ユンタ

民謡の多くは難解な沖縄方言の歌詞で歌われるために本土人には外国語同様だ。ただし沖縄人の日常会話はきれいな標準語である。名高い『安里屋ユンタ』の、「マタハリヌ、チンダラ、カヌシャマヨ」の意味は沖縄人でも知らぬ人が多いという。これは沖縄本島ではなくてもとは八重山諸島の竹富島の民謡である。

後日、ひめゆり部隊生き残りの教職員で沖縄方言の研究家でもある琉球大学名誉教授の仲宗根政善先生（那覇市在住）と竹富島の故老、野底氏に長距離電話で教わったところによると、「マタハリヌ」は単なる囃子で、「チンダラ」の「チン」は肝の意味が転じて心となり、「ダラ」は「優しい、可愛い」の意。「カヌシャ」は日本古語の「かなし（可愛い）」の訛りで、「マヨ」は「女よ」。したがって全体の意味は「なんとまあ、可愛い、可愛い娘だ」となる。

▲二見情話における民謡の演奏

本来この歌は、竹富島の親村玻座間の安里屋にいたクヤマという絶世の美女を思慕した土地の役人たちのやるせない気持を歌ったもので、その原歌は二十二番もある長い物語風の歌詞となっている。最初のあたりは次のとおりだ。

安里屋ぬ　クヤマによ
あん美らさ　生りばしよ

目差主ぬ　くゆだらよ
あたる親ぬ　望むたよ

目差主や　ばなんぱよ
あたる親や　くりやおいす

（訳＝①安里屋のクヤマという娘はあんなに美しく生まれついた。②目差（助役に相当）にも求婚され、与人（村長格）からも求婚された。③クヤマは、目差の妾はいやだ、与人なら奉公しましょうと答えたので、私はあきらめた＝川平朝申著『おきなわの歌と踊り』より）

野底氏によると、いまでも竹富島では可愛い女の子にむかって方言で「チンダラサ、カヌサ（可愛い、可愛い）」と呼び

かけるが、男の子には言わないという。

八重山諸島に鳴り響いた美女のクヤマは実在した人物で、竹富島の与人の愛妾として一七七九年に七十八歳で世を去った。

この歌を戦前に大浜村の小学校教員、星克氏が作詞し直して、更に沖縄師範教諭の宮良長包氏が編曲したものが現在沖縄で広く流布している次の歌である。

サー君は野中のいばらの花か
　　サーユイユイ
暮れて帰ればやれほに引き止める
マタハリヌ、チンダラ、カヌシャマヨ
　　（以下略）

なお、ユンタというのは八重山の労働歌謡の一種で『読み歌』が転訛したものといわれる。田草取り、米つき、地つきなどをしながら音頭取りと囃子の二組に分かれて互いに掛け合いで歌うのが特徴である。

沖縄民謡には恋歌が多い。方言であるにせよ多くの歌詞には本土の古い大和言葉が織り混ぜられて美しく、格調高い。

我身愛しゃらば　御胴愛しくに
我身よりも優て　思て賜ぼうれ

（訳＝私を愛して下さるのなら、あなたご自身もいとおしんで下さい。私を思う以上に御体を大切にして下さい）という溜息の出るような名歌もある。これは花風節の最初の一節で、各行の右側につけたルビが沖縄方言による発音を示している。

沖縄の民謡に関して紹介し続けるとブレーキがかからなくなるので、ここらでおくことにしよう。

## さらば南海の楽園！

五月五日。沖縄滞在最後の日だ。前日よりは空が霞んではいるもののお天気は上々である。帰京してまもなく沖縄は梅雨入りしたというから全くツイていた。

九時半に全員ホテルを出発する。二台の乗用車に荷物類を積み込んでバスですぐ近くの東南植物楽園へ行く。ここには世界で知られている三千三百三十三種類のヤシの内（ヤシにそんなに種類があるとは知らなかった）、四百五十二種類のヤシが植えてあり、その他熱帯の果樹や原色そのものの熱帯花木などが無数に密生して壮観である。特に真紅のハイビスカスやブーゲンビリアなどが撩乱と咲き乱れて美しい。園内には水上楽園もあり、そばの広い芝生に大勢の行楽客がグループ別に座って遊んでいる。沖縄の人はおおらかでのんびりしているのか、本土の行楽地のような喧騒さがない。芝生に寝転ぶと心底から生き返ったような気がして、ひどい騒音に満ちた東京へ帰るのが億劫になってくる。

十二時三十分にバスで出発して市内のプラザハウスへ行く。ここはアメリカでよく見かけるドライブインマーケットとそっくりで、看板類の日本文字を横文字に変えればアメリカだと勘違いするだろう。しかし店内はアメリカのそれのように雑然としておらず、ずいぶんきれいだ。

▲東南植物楽園にて

沖縄市はもとのコザ市を基盤に米軍相手に発展した町だからアメリカ色豊かだ。四十九年に美里村と合併して沖縄市と改称したが、いまもコザ十字路と共に町の中心をなしている。

三泊した中部の町をおさらばしてバスは那覇市内へ入った。もと首里城の第二坊門であった『守礼の門』（戦後復元）をバックに大急ぎで全員記念撮影をする。欲をいえばもう一泊して一日を那覇市見学にあてれば申し分ないところだが、そうもゆかぬ。国際通りでのショッピングを最後に支部の方々と尽きせぬ名残りを惜しみながら那覇空港を出発したのは六時近くだった。

全く素晴らしい旅だった。私たち二十二名のために心温たまる接待をされ、万全の態勢をしいて準備し、案内をして下さった沖縄支部の宮城代表、稲嶺、喜屋武、石野、新里、喜友名、比嘉、普久原の各氏やその他の方々にあらためて衷心よりお礼を申し上げたい。また本土より参加された方々の見事なご協力にも深く感謝する次第である。

今年復帰十周年を迎えた沖縄にはよそ者の理解を超えた深刻な事情がひそんでいるのかもしれないが、二十四万人の汗と涙と鮮血を流した大戦争の惨禍から驚異的に復興したこの島では永遠の平和を祈る鎮魂の挽歌をうたい続けねばならぬ。戦火で焼けただれた地獄の大地を美しい緑の島に変貌させて一大リゾートと化したこの南海の楽園で二度と銃声を響かせてはならぬ。沖縄の波よ静まれ、そして風も！　来年もこの優しい島を訪れて支部の方々と美しい交友を続けたい。

**（掲載写真はすべて筆者と助手の松村芳之君による撮影）**

**付記**　鬼神をも哭かしむる沖縄戦と、ひめゆり部隊の正確な史実を伝えるすぐれた資料として左記の図書がある。

(1)『これが沖縄戦だ』大田昌幸編著
　　那覇出版社　一七〇〇円

(2)『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』
　　仲宗根政善著　角川文庫　四二〇円

(1)は米軍撮影による珍しい記録写真を満載した一種の写真集でもあり、正確な

年譜もつけてある。(2)は戦争中ひめゆり学園の教職員で女子学徒隊と行動を共にして負傷し生還された著者の克明な記録と女生徒たちの手記から成るもので、特に第三外科壕でガス弾の攻撃を受けながら奇跡的に助かった五名の女学生の手記には極限下の状況が見事に活写してある。戦記としては世界のトップをゆくものだろう。無数のウジのわいた多くの腐乱死体と共に女生徒が壕内ですごした酸鼻をきわめる光景はこの世のものとは思えぬほどに凄惨である。心臓の弱い人にはおすすめできない。また女子学徒隊について筆者へ直接に貴重なインフォメーションを与えて下さった比嘉氏と仲宗根先生に深甚の謝意を表する次第である。

なぜ沖縄戦でかくも多数の戦死者が出たのか？　理由は明白だ。軍国主義が頂点に達した太平洋戦争中、軍部は「生きて虜囚の辱しめを受けるよりも死して護国の鬼となれ」式の思想を徹底的に全日本人に叩き込んだのと、「米軍の捕虜になれば虐殺される。婦女子は凌辱された上、八つ裂きにされる」と信じ込ませたからである。しかし投降した一女学生は米兵が水や食糧をくれた上、親切に扱ってくれたので「不思議な光景だった」と手記に述べている。恐るべきは戦争自体よりも軍部や軍国主義政府による催眠術的な思想教育であったといえるだろう。

ちなみに沖縄戦が熾烈をきわめた二十年五月頃、筆者は島根県松江連隊から新潟県の高田連隊に転属し、新部隊の編成にそなえて待機中だったが、沖縄の大激戦については将兵とも全く知らされていなかった。これを知ったのは戦後である。松江連隊の同年兵約二千名が三月末に沖縄増援軍の一部として輸送船で派遣される途中アメリカの潜水艦に撃沈されて全滅したことも戦後に知った。筆者はこの部隊に入れられず、少数の内地残留組にまわされたのである。この部隊には小学校の同級生を含む戦友が沢山いたが、みんな死んでしまった。

# 「沖縄支部大会と南国の旅」に参加して

（到着順に掲載）

## 素晴らしかった沖縄の印象

神奈川県　内藤重雄

GAPの旅行はいつも素晴らしいとは聞いていましたが、実際にこれ程楽しく有益であるとは今度初めて一緒に旅して体験し、つくづく実感しました。

第一回支部大会を実行し且つ私達の生活と観光迄つきっきりで面倒みて下さった宮城支部長や支部会員の方々、そして遥々二千粁の海を渡って大会に参加した吾々も誠心誠意などというありきたりの心でなく、宇宙の意識であるところの愛を表現しようとの想念がこれ程の立派な結果を生みだすのだと思います。天候すら私達の想念を表現したようでした。到着の日は土砂降りの大雨、降り始めの一日から三日迄で百粍の雨量だったそうですが、沖縄では既に九ヵ月も雨が殆ど降らず、隔日給水で大変な水キキンの所だった訳で、宮城さんが「GAPが雨を持ち込んでくれて有難う」と挨拶される程の恵みの雨だった訳ですから吾々としても沖縄の人や動植物の為に大いに喜んだ次第でした。而も一日目は戦跡回りで比嘉さんの沖縄戦体験者として実感こもる説明で、戦争の名残りと恨みをとどめる山川草木や記念資料館等をまわる時は私達の涙替りの雨のような気さえした程です。殊にひめゆりの塔では篠つく豪雨でクライマックスでした。

支部大会の日も雨もようでしたが、久保田会長の説得力百%の、宇宙の愛と意識や無のお話など大変昂揚感の漂う一日でした。その他驚くべき話をして頂いて、沖縄の雨を更めて祝福したりなど十時から五時迄の一日を短く感じる程の大成功の大会の一日でした。そして四日五日は晴れ。余りの天気配分の見事さに只の人間としてはあっけにとられるばかりでありました。

海洋博公園は立派だし水族館もよかったし、海で泳いだのも楽しかったし、植物園や水上楽園など羨しくなる程の熱帯風景など沖縄は恵まれた土地柄で、これ程の恵みを賜わった土地が今後永久に平和で神の恵みの表現を高めてゆくことを祈りたいと思いました。

自然の風物が素晴らしい以上に素晴らしいのは人々でした。会員の皆さんの剛毅朴訥、親切さ思いやり、親しみ易さなど東京近辺で暮らす私などからみると遥かに神に近い位置で生きていられると感じました。三日間バスの運転をした運転士さんをみていると、徐行し窓をあけて人の道案内をしたり、道の真中で立往生の車を何度も助けたり観光説明をしたり、まるでGAP会員ではないかと思う程の思いやりと奉仕の念の溢れた人でした。

沖縄は私たちが帰路についた五日の夜半すぎから雨だと機内のテレビは予報していました。

## 美しい自然の南国旅行

栃木市　橋本　明

五月二日、沖縄空港に着くと現地会員の方々が出迎えられ、すぐに南部戦跡等の見学をしました。現地の比嘉氏の説明を受けたり当時の記録類を見学して、この沖縄の地がいかにひどい戦場であったかを知りショックを受けました。戦争の廃絶、平和の維持がいかに大切であるかを改めて感じました。見学後は夕食会に歓迎されました。

三日は十時より沖縄支部大会が開催されました。最初の東京の田中氏の講演は物理面の話や仕事での話など興味深く聞かせてもらいました。

次に久保田先生が講演なされましたが今回は総合的かつ深遠な内容で、第一回沖縄支部大会ならではの講演ではなかったかと思いました。講演のあとも自己紹介、質疑応答などの時間がたっぷりとあり、内容の濃い大会ではなかったかと思います。

支部大会後は夕食会、二次会で沖縄の

方々と大いに語り合うことが出来ました。

四日は北部地方の観光に出かけました。海岸沿いのドライブ、珊瑚礁によりすばらしい海の色を呈している万座毛、海洋博記念公園での楽しいひとときなど沖縄の自然のすばらしさを感じさせられた一日でした。

五日は東南植物園を見学しました。私達のところではビニールハウス型の植物園が普通ですが、ここでは自然のままで、広い敷地が植物園となっています。ほんとうに南国にきたという感じでした。

午後那覇市内に入り、経済連民芸センターでショッピングを楽しみました。

こうして四日間の楽しかった沖縄の旅が終わりましたが、ふりかえって見ますと沖縄支部会員の方々の万全の準備と、費用度外視の歓迎ぶりをいたるところで感じました。また、行き帰りも二十名もの会員の方々と団体行動がとれ、和気あいあいとした旅でした。私など見習う面が多々ありましたが、GAPの企画はいつもすばらしいと改めて感じました。

今回の企画にお骨折りいただいた沖縄の方々、久保田先生、田中氏、本土から参加された方々、ほんとうにありがとうございました。

## 全く楽しい四日間

**静岡県　鈴木芳美**

五月二日朝七時に羽田に着くが、まだ早いのでGAPの人たちは誰もいない。空港内を時間つぶしにブラブラ歩いたり椅子に座ったりしていると、どんなレッスンが待っているのだろうかと考えてしまう。生まれて始めて今までで一番遠い地に行くのだという実感がしてくる。習慣的な考え方をコントロールするのが難しかった。九時ごろになり沖縄行きカウンター前に向かうと見覚えのある人がいた。センダ氏である。自分の内奥から暖かいフィーリングを感じた。ついにみんな沖縄に行く時が来たのだという一体感がした。

全員集まり日本航空九〇三便で二時間三十分で那覇空港に着くと支部の人たちが暖かく迎えてくれた。そして全員南部の観光に出発した。特に四十万年の歳月を経たという玉泉洞には圧倒されてしまった。おなかの虫が鳴り始めた時に頂いたサンドイッチのおいしかったこと。夕方は歓迎夕食会に招待されて、沖縄第一日目を満喫しました。

五月三日は大会の日である。久保田先生の講演の中で、現在から未来にかけて新しい希望を持って生きていかなければいけないという話。私自身ついつい過去に執着してしまうタイプなので、これから体験を積み、少しでも習慣的な想念に支配されないよう努力するつもりです。大会終了後は合同夕食会でみなさんと話に花が咲き、あっというまに時間が過ぎてしまいました。

五月四日は嘉手納基地で見る巨大なジェット機。ものすごい爆音に驚いてしまった。また水族館で見る海の中の生物。これほど私を夢の世界へひきずりこんでしまったものはないだろう。巨大な魚や奇妙な姿をした魚、近くで見るエイ、魚の種類の多いこと、生命の偉大さを痛感した。会場内のビーチで海水浴。久し振りに水と戯れて最高の気分であった。久保田先生の豪快な泳ぎを拝見したかったのですが、先生は砂浜でみなさんが海に入っているのを暖かく見守っていて下さっているという感じでした。

五月五日は東南植物園で珍しい植物を見てマインドをコントロールするのがたいへんでした。ハイビスカスの美しいこと、すごい数の蝶の標本、驚きに満ちたまま外へ出ると太陽の光が緑の芝生に輝いており、そこに腰をおろしひと休み、おいしかった手作りのパン。平和であることをありがたく思いました。これですべての沖縄での日程も終わり那覇空港へ向かいました。空港で四日間を回想していると沖縄の人たちの心暖まる歓迎に思わず涙ぐんでしまいました。沖縄支部のみなさんほんとうにどうも四日間ありがとうございました。

## 行ってよかった！

**長野市　藤沢清則**

東京月例会にて沖縄支部大会のお話を耳にし、どうしようか迷っておりましたが、ニューズレターの広告の写真を見るにつけ、これがカラーであったらさぞかしすばらしい景色だろうなと思っていますと、一瞬そのイメージが浮かび、なんともいえない感動で体が震えるのがわかりました。旅行などまったく縁のない私でしたが、さっそく行くことにし、幸い会社の休みとも重なりOKでしたが、体調がよくなく、鼻炎で鼻も喉もよくなく、こんな調子でほんとうに四日間も旅行できるのだろうかと不安でなりませんでしたが、例の写真を見ながら「沖縄の海岸をながめながら感激し震えている自分」を何度もイメージしました。そのためか旅行中は一度も体調が悪くならず、とても助かりましたが、長野にもどって二日もすると寒さのせいか、またぶり返してしまい、今思うに体の方のイメージをもっと強く描いておけばよかったかなと思う次第であります。

五月二日午後那覇到着。あいにくの雨にもかかわらず沖縄支部の方々による歓迎を受け、マイクロバスにて、ひめゆりの塔、南部戦跡を見学。特に資料館では貴重な体験をすることができ、また旧軍人の水筒などからもこたえられないフィーリングのようなものを感じました。

三日は沖縄支部大会にて田中氏、久保田会長の講演の後、自己紹介、質疑応答が行われ、特にUFO問題について珍しい話を聞かせて頂き、ときどき他の支部大会にも出席すべきだと痛感しました。なお当日は母船が出現し、新里氏と関氏が目撃されたそうです。

各海岸、万座毛、海洋博記念公園などはとても素晴らしく、エメラルドグリーンの海を見るたびに本当に来てよかったと思いました。なおこの日の夜、ホテルへの帰りにUFOが目撃されるなど素晴らしい一日でした。

最後に今回の沖縄支部大会と島内観光にていろいろ御援助いただいた沖縄支部の方々に心より感謝し、また今回の旅行を計画された久保田会長と田中氏に厚く感謝いたします。

## 同志との高次元な雰囲気

栃木県　小川　隆

悩んだ末行く事に決心した沖縄。その理由は私の恐怖心が強いからなのです。そして飛行機に乗るのが怖かったから。でも久保田先生の旅行は絶対に事故はないからと、ポストの中に「沖縄支部大会と南国の旅」に参加します、と書いた葉書を、内部の何者かに〝行くんだ〟と押されるようにして入れました。

沖縄での四日間は他の団体では味わえない雰囲気で満ちていました。なにしろ同じ事を研究し、レッスンしている人達と終日一緒にいて何気兼ねなく話し合えるのですから、高次元の雰囲気になるのは当たり前でありましょう。支部大会での久保田先生の講演と質疑応答の内容も、聞いた事のない話があり、驚きと共にこれからますます自己研摩に励まねばと思いました。

観光では南部戦跡、東南植物楽園とさんご礁の海と砂浜、海水浴、沖縄民謡などが今でも思い出されます。特に海水浴はいまかいまかと待っていたものであり、存分に楽しみました。

夜、ホテルで同室した野本さんとの尽きる事のない宇宙の話。同じ目的を持った人々と数日間一緒にいるという事は素晴らしい事です。言葉や文章ではあらわせない、まだ私が気が付かない何かを学び、私の進歩になったと感じています。

行きと帰りの機中で久保田先生の隣の席になり、窓際の席まで譲っていただき、ありがとうございました。おかげで安心して旅行が出来ました。

沖縄支部の皆さんには四日間御世話になりありがとうございました。御陰さまで楽しい思い出とレッスンが出来ました。こちらへ来た時はお立ち寄り下さい。沖縄の皆さんまた会いましょう。

## 戦争は絶対にいけない

埼玉県　大崎孝典

五月二日午後一時半に沖縄空港に着き、沖縄支部の皆様に金星のシンボルマークの旗で暖かい出迎えを受け、用意していただいた小型バスに乗り、一路戦争激戦地と資料館に向かいました。そこに着くまでに比嘉さんの案内にて戦争の状況や小さい時の戦争体験の話や説明を受けました。その説明があまりにもリアルなので、その状況がありありと浮かぶ思いです。ここで戦争というものはどんなことがあってもやるべきではないと痛切に感ぜずにはいられませんでした。

この日は一日中雨でありましたが、たしかここ一年間、雨らしい雨が降らなかったと聞いていまして、沖縄に行ったら水に困ると思っていました。でもGAP会員の皆様の想念が恵みの雨を運んだようで、たいへんな喜びようです。この雨は水源地では満水時の六十パーセントを満たしたとニュースでいっていました。本当によかったと思います。

夜は沖縄支部会員の皆様による晩餐会の招待です。これにはただただ恐縮しました。

三日は沖縄支部大会です。この日も雨でしたが、沖縄の皆様が大勢つめかけて大会が始まりました。初めに支部長の挨拶、田中義則氏の原子物理学と宇宙との関係の講演、そのあと久保田会長の宇宙哲学、宇宙の愛その他の話があり、このなかである問題について重要な説明があって、会場の皆さんが騒然とする場面もありました。

午後の質疑応答のとき、内藤重雄氏が東京月例会での講演の続きをされて、人間の細胞と想念の働きを説明され、新しい発見をする思いでした。

最後に沖縄の支部代表ならびに会員の皆様の暖かいお心づくしに心から感謝しますとともに、今後の支部の発展と皆様のご健康をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

## 宇宙の大海の魚

神奈川県　千田光明

先日の沖縄支部大会と南国の旅に参加させていただきましてありがとうございました。何か沖縄から帰ってからすっかり夏のような春という印象が思い浮かぶ日々で「行ってよかった」と思うと同時に、このような素晴らしい機会に感謝しています。又、久保田会長の「愛のフィーリングに包まれた人はよき運命が展開する」及びある重要な問題に関する話等、とても内容の濃い御講演でした。地元の沖縄支部会員の方々の熱意と誠実さは驚くばかりで感謝にたえません。バスのガイドまで沖縄支部の方々が案内して下さいましてお世話になりました。

出発当日の沖縄は大雨大洪水といった天候でしたが、沖縄空港到着後に少しの間、雨が止んだり、支部大会翌日の海洋博見学や海水浴等の日は晴天となり恵まれていました。やはりどういうわけか、GAPは天候に恵まれているのかタイミングがよいのかと思いました。

沖縄のサンサンと照りつける太陽までが祝福しているように思えてなりませんでした。見渡す限り透明な美しい沖縄の海や自然の景観は、宇宙の大海の中にいる魚のような生き生きとした感じでした。人間のエゴまでもが一体性によって包容され理解されているように思います。「信念のある人は見えないものを見、信じがたいものを信じ、不可能な物事を可能にする。信念こそパワーだ」の言葉を借りて、ともに一歩ずつ進んで行きたいと思っております。楽しく有意義な旅の時、いろいろとお世話になった沖縄支部の方々、沖縄行航空券等で御苦労なさった田中正氏に感謝の気持をお送りしたいと思います。今後の沖縄支部のご発展と皆様のご健康をお祈り致します。

## 歴史をよき方向につくろう

仙台市　石田義雄

南国沖縄のイメージに期待感をふくらませながら飛行機を降り、出口のほうに歩いていくとGAPのマークの旗が目にとまった。沖縄GAPの会員の方々が迎えに出てくださっている。ほっとしたような安心感につつまれる。その後マイクロバスにのり南部戦跡を見学する。支部会員の方の名解説付きで興味は尽きる事を知らない。その日の夕食会では大変御

（三十二頁に続く）

# 十戒

The Ten Commandments

パラマウント映画　　CIC配給

**今年度総会で上映**
**会員必見の名画！**

古代イスラエル民族の宗教的・民族的英雄で大律法者であったモーゼは、旧約聖書の五大書『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』の主人公となる偉大な指導者である。その生涯を描いた雄大なこの映画は巨匠セシル・B・デミルの二度目の作品で、二万五千人が登場、十万点の小道具、ピラミッドや巨大な宮殿のセットを使用、物語の再現性と意義、構想とスケールにおいて映画史上最大の金字塔と称せられる超弩級。一九五七年度制作にもかかわらず、いつ観ても驚異と感動で震えさせる不滅の名作である。

**★来たる十月十日（日）、日本GAP総会で上映の予定。**GAP会員は次の〝秘話〟の理由によりぜひ観賞されたい。総会の詳細は三十九頁を参照。

★パラマウント映画。映写時間二時間四十三分（途中休憩あり）。

## あらすじ

古代エジプト、ラーメス二世（前一二九〇～一二二三）の当時、奴隷として苛酷な労働を強いられていたイスラエルの民を解放する救世主が出現するという予言が流れたため、奴隷たちの新生児のうち男児を皆殺しにせよという残忍な布告が王によりエジプト全土に発令され、幼児の虐殺と母親の絶叫で地獄図絵が展開した。

しかし揺り籠に隠されてナイル川に流された幼きモーゼは王女ビシアに助けられ、やがて王位を継いだセティの時代に逞しく成長して、エジプトのあらゆる学

間を身につけ、英邁な将軍になった。そして次代の王位を継ぐ若き候補者と衆目のみなすところとなった。だが同胞を食いものにしていた悪人のために出生の秘密を暴露されたモーゼは一大ショックを受けた。

ファラオ・セティの実子ラメシス王子は実権を握るための邪魔な存在であったモーゼを蹴落とす口実がつかめたので、ここに二人の宿命的な対立が始まる。

やがて敗北したモーゼはラメシスにわずか一日分の食糧を与えられて、生きて帰るのは不可能と思われる大砂漠に追放された。神の力にすべてをまかせたモーゼは力尽きた体で果てしない砂漠と広野を放浪する。

しかし奇跡的にシナイ・アラビアの遊牧民ミディアン族の羊飼いに出会ったモーゼは彼の美しい娘と結婚し、男の子をもうけて平安に暮らすことになる。

ある日、ひどい労役を課されていたシナイ半島の銅山から逃げて来たヨシュアが現れ、モーゼの心にかつての痛ましい奴隷の生活がよみがえる。モーゼはシナイ山の岩壁に登り、神の静かな声を聴く。

「汝をファラオ（王）のもとにつかわし、わが民イスラエルの子たちをエジプトより導き出さしめん」

モーゼは神の力を得て解放者になった。エジプトには疫病がはやり、すべての水が血に変わり、ラメシスは挫折感に襲われている。だが王女ネフレテリはラメシスに戦いをけしかける。

好機到来とばかりモーゼと従者ヨシュアは数千人の奴隷を解放して（注＝『出エジプト記』には女子供を除いた徒歩の男子だけで約六十万とある）モーゼを先頭にエジプトからの大脱出が開始された。

しかし紅海の海岸まで王の戦車の大軍が追撃する。そのときモーゼに宿る神の力は紅海を真っ二つに裂き割って、イスラエルの民を安全に通過させたが、王の大軍は怒涛に呑み込まれて全滅する。

難を切り抜けたイスラエル人たちは酒と安堵の心に酔いしれて男女は淫蕩をきわめた。モーゼはシナイの聖なる山で神から授けられた十戒の石板をかかげて彼らをいましめるのであった。

(1) 我は汝の神ヤーウェ、汝をエジプトから導いた者。我のほか何ものをも神とするなかれ。
(2) 汝自らのために偶像を作って拝み仕えるなかれ。
(3) 汝の神の名をみだりに唱えるなかれ。
(4) 安息日をおぼえてこれを聖とせよ。
(5) 汝の父母を敬え。
(6) 汝、殺すなかれ。
(7) 汝、姦淫するなかれ。
(8) 汝、盗むなかれ。
(9) 汝、隣人について偽証をするなかれ。
(10) 汝、隣人の家やその特物をむさぼるなかれ。

これらは最も進歩した宗教の類型を示す唯一神への信仰を示し、不完全な人間の感覚の産物である偶像を否定し、働きすぎをいましめて休息の神聖さを強調するとともに、父と母を同列において男女平等を示唆するなど、現代でもキリスト教を母体とする欧米諸国の倫理道徳の中核をなして重視されている。

## 見どころ

海が真っ二つに割れるシーンが最大の見もので、その他、十戒が強烈な光によって岩板に刻まれる場面、炎の柱が軍勢を阻止する光景、ナイル川が鮮血に染まる場面などは驚異的なスペクタクルである。また精密な時代考証による古代エジプト人の衣装、石造の建築物などは、三千年昔の歴史の再現であり、教育的価値も高い。そして主役のチャールトン・ヘストン（モーゼ）とユル・ブリンナー（ラメシス）、アン・バクスター（ネフレテリ）、サー・セドリック・ハードウィック（ファラオ）などの豪華キャストによる熱演は、これを映画史上三大作の一つたらしめた要因をなす。（注＝映画史上の三大作とは『十戒』『風と共に去りぬ』『ベン・ハー』）

## 秘話

モーゼに関する旧約の物語は近年聖書考古学の調査研究により事実の線が濃厚になっているが、宇宙考古学的にいえば、ずばり〝事実〟である。

モーゼは偉大なコンタクティーであった。エジプトから脱出する彼とイスラエルの民を導いた〝主〟とは異星人であった。

「主は彼らの前に行かれ、昼は雲の柱をもって彼を導き、夜は火の柱をもって彼らを照らし、昼も夜も彼らを進み行かせられた。昼は雲の柱、夜は火の柱が民の前から離れなかった」（『出エジプト記』十三・二十一―二十二）

この〝雲の柱〟はフォースフィールドに包まれた大母船、〝火の柱〟は強烈に輝く船体を意味している。この金星の大母船がイスラエルの大部隊を終始上空から導いたのである。

この超大作映画の制作時にはスペース・ブラザーズがそれとなく援助したといわれている。アフリカの大砂漠でロケを行った際に、本物の黒い円盤が空中に出現して画面に写し込まれている。それはイスラエルの民がエジプトを脱出し始めたあたりで、よく気をつけていると、瞬間的に空中に見えるときがある。

旧約のモーゼに関する記述には荒唐無稽と思われる個所が多いけれども、これは『エゼキエル書』と同様、一種のコンタクト物語なのだ。しかしなにぶん大昔のこととて内容がかなりゆがめられてしまった。新約も同じである。そして偉大な指導者にありがちなコンタクト事件は信奉者によってすべて神秘視され、宗教化されてしまい、現実の世界から幻想的な分野に閉じこめられてしまう。

モーゼの十戒はバック・ネルソンが金星人から与えられた宇宙の法則と酷似している。そこでネルソンにもとかくの批判があびせられるのだが、宇宙の法則が永遠不変であるものならば、三千年経過してもやはり同じような内容である筈だ。それは現代人にも不滅の法則である。

なお映画のストーリーは旧約のそれと同じではなく、部分的に変えてあるが、本筋は大体に合致している。（久保田記）

（二十九頁より続く）

馳走になり有難うございました。

翌日の支部大会は久保田先生の素晴らしい講演、そして田中氏の原子とそのまわりの電子とテレパシーの関係について非常に興味のある話がありました。その後熱心な質疑応答があり雰囲気の盛りあがった大会となりました。

三日目、四日目は素晴らしい景色の見える所や植物園等盛りだくさんの見学場所をマイクロバスで次から次へと案内してもらいました。所々に茂る熱帯植物を見ていると沖縄に来たんだなという実感が強くわいてきました。

また沖縄の民謡を十分に聞く事ができました。この沖縄独特のメロディーが好きな私にとってはうれしい企画でした。

南部戦跡を見て、敗戦というものに対して自分が持っていた認識の甘さを感じました。地球では戦争の歴史を重ねています。そして歴史は繰り返すといいますが、しかし新たな歴史も作る事ができるのであり、良い方向にむけて歴史を作るべきだという思いが強くなりました。

とにかく予想以上の楽しい旅行でした。あっというまに時間がすぎていったようで、帰りの飛行機に乗る時も四日間も沖縄にいたのかと感じたほどでした。そして赤いハイビスカスの花と沖縄の人の親切さが強い印象となって残りました。機会があったらまた沖縄に行きたいと思っています。

このような素晴らしい沖縄旅行で四日間にわたってつききりで親身なお世話をいただきました宮城氏、稲嶺氏、新里氏、喜屋武氏および沖縄支部の諸氏に心からお礼を申し上げます。本当にどうも有難うございました。

## 沖縄支部の高遠なフィーリング

**群馬県　植松和市**

この度の『沖縄支部大会と南国の旅』におきまして久保田先生には大変お世話になり深く感謝申し上げます。又沖縄支部会員の皆様方にはなみなみならぬ心づくしに心から感銘致しております。沖縄は前々から行きたかった場所であり、本当に素晴らしい旅をさせていただき有難く思っております。

あいにく那覇空港に到着後一日目は大雨、南部戦跡を見学しながら戦争当時の苦しみの波動がいまだただよっているようで、何か我々が行った感激の雨なのか戦争への悲しみの雨なのか、どちらにせよ、この波動により私はその夜うなされてベッドから落ちそうになり、壁に腕をぶつけてアザができてしまったり、又二日目は私自身意識はなかったのですが、「こわいよう」という寝ごとを言ったそうです。普段こんなことはないのに、よほど私にとって強烈な印象であったようです。

しかしながら沖縄支部大会の素晴らしさ。又、沖縄支部会員の高遠なフィーリングに接し、又、久保田先生をはじめとする本土会員の方々のハイレベルの人たちに接する機会に恵まれ、又、エメラルド色の海と照り輝く南国の太陽と緑につつまれての旅に、初日の痛々しいフィーリングもいつしかけしとび、沖縄の美しさ素晴らしさを体全体で受けとめることができました。

今回私は多くの熱心な高度の人たちに接することができ、色々学ばせていただきました。特に自分自身アダムスキー哲学を生涯の教えとし、又ただ教書としてでなく、なにごとにも実践をモットーとし、できるだけ自然に接し、テレパシックな人間になるよう、よりいっそうの努力をしなければと痛切に感じたしだいです。今も沖縄での余韻がさめやらず、今まで仕事の忙しさを理由にテレパシーの練習をおこたっていたのですが、今では毎日練習するようになりました。まだまだ期間はかかるようですが、これからも実践していきたいと思います。私に新たなアダムスキー哲学をめざめさせてくれた今回の旅は私にとって生涯忘れえぬ出来事となるでしょう。

今回沖縄支部長の宮城氏をはじめ多くの会員さんには心づくしのおもてなし、本当に有難う御座居ました。心より感謝申し上げるとともに今後の沖縄支部の御発展をお祈りしながらこの紙面をお借りしましてお礼の言葉にかえさせていただきます。最後にこのような素晴らしい旅を企画されました久保田先生、田中氏に心よりお礼申し上げます。

## エメラルドグリーンの海と青い空

**長野県　赤羽和子**

このたびの沖縄旅行は久保田先生の貴重なお話を始め、すばらしい多くの方々とお話をする機会に恵まれ、私にとって非常に実り多い旅行でした。

又沖縄支部の皆さんの御苦労で沖縄本島のほとんどを見る事が出来、二倍も三倍もすばらしい旅でした。

私は皆さんとは全くの初対面なのに随分以前から知っていた様な、なつかしさと、旅行中ずーっと、さわやかな一体感がありました。皆さんの暖かさの中でありのままの私でおれた事を嬉しく思っています。自分が受け入れられた時の喜びを知り、私も人に対してその様にしたいと思いました。

三日目の海洋博記念公園では今まで見た事もない沢山のあざやかな魚の群れが広い水族館の内で泳いでいました。その何とも美しい光景に立ちすくんでしまい、一日中でも見ていたい気持ちでした。

それから会場内のビーチで海水浴。全くの山国育ちの私が一番楽しみにしていた沖縄の海でのひととき。エメラルドグリーンの海と青い空の下で思う存分泳ぎました。泳いだ後、体がとてもリラックスして意識が快く通過していくのがわかり、身心共に新鮮になりました。

次の日東南植物園で素足で芝生にすわっていた時も同じ様にリラックスし、わずかに体内からエネルギーが流れ出ていくのが感じられました。

この旅で得た体験をもとにいつも新鮮な心でがんばりたいと思っています。

久保田先生はじめ沖縄支部の皆さん、そしてこの旅でお世話になった皆さん、どうもありがとうございました。

（以下次号）

## 沖縄支部大会を終えて

沖縄市　稲嶺誠一

沖縄支部大会、大変ありがとうございました。御多忙にもかかわらず、沖縄までお越し下さいました事を心より感謝致したいと思います。

初日から雨で最悪の観光となりましたが会員の方々の高貴な想念は私達に大変大きな教訓を残してくれました。また数々の失敗にもかかわらず、大きな寛容で見守って下さった久保田先生はじめ本土会員の方々に厚く御礼申し上げます。

この度の久保田先生の御講演は私共にとって本当に夢の様な出来事でした。思うようにお話をいただく機会がありませんでしたが、しかし私は多くの無言のお話をなされた事と信じます。そして、先生から放たれる想念を私は肝に命じ、これからの活動に前進していきたいと思います。そして、改めて沖縄の自然の美しさを認識する事が出来ました。今帰仁城跡あたりの人々の人情の温かさは沖縄では最大のものだと確信致します。今は胸が一杯で思う様に文が書けません。

最後にこの度の支部大会の数々の失敗をお許し下さい。そして久保田先生はじめ本土会員の方々に厚く御礼申し上げます。宮城支部長も大変良く責任を果たしてくれました。そして沖縄支部会員の皆様にも感謝し、そしてこの度の大会にて心を一つにする事が出来ました。

これにこりずに、今後とも御指導願えればと存じます。本当にありがとうございました。お体に気をつけて久保田先生頑張って下さい。

## 沖縄支部大会大成功

沖縄市　普久原朝淳

久保田先生お変わりありませんか。沖縄支部大会が終わって早いもので一週間がすぎようとしております。沖縄に来てからの二日から三日の支部大会のご講演、四日の観光、五日の植物園、そして東京へと休む間もなく、連日の忙がしさに疲れたことと思いますが、これから先も頑張って下さい。

私たちにとって今回が初めての支部大会で沖縄支部一同、五日の空港での見送りまで事故やまちがいがないよう、久保田先生初め本土各支部のみなさま方のお世話と沖縄支部大会がとどこおりなく成功したことに心から感謝しております。久保田先生を通してみなさま方にお礼の言葉とこれから先、日本GAPの発展と久保田先生のご健闘をお祈りし、これからもますます健康で日本GAPのために頑張って下さい。そして沖縄支部をこれから先もあたたかく見守って下さい。

## 松山支部大会での思い出

広島市　近藤久美子

先日はお忙しい中、松山支部大会での素晴らしい御講演をありがとうございました。また今日は大会での美しいお写真を頂き、心よりお礼申し上げます。

始めて参加させて頂いた昨年の大会を思うとわずか一年ですが、GAPがなくてはならないものになっている自分に気付き、とても熱いものを感じました。また先生の御講演の内容は感覚的には理解出来た気がするのですが、応用実践となると少しむずかしい感じがします。今までの初歩的なことも実践が出来ていませんので、大いに反省して、これからのステップに出来れば……と思いました。

夕食会等で皆さんのように先生のお側でお話は出来ませんでしたが、とても暖かな眼差しを向けて頂き、楽しい素晴らしい時を過ごすことが出来ました。いつもは伊藤さん、佐々木姉妹、升田さんを始め素晴らしい方々に囲まれて何かと励され、また導かれています。今回はその上各地から皆さんに足を運んで頂いて……心から感謝しています。広島駅でのお見送りではつい感傷的になってしまって申し訳ありませんでした。

## 夢で指導される

東京　大野美智子

私はこの頃あまりUFOを見ません。それと言うのも、見たい見たいと願って空を見上げることが少なくなったからかもわかりませんが、あまり長期にわたって見えないと、今度は「とうとう私も日頃の想念のあり方が悪過ぎるので見放されたのか、さもありなん」と急に淋しくなるのです。そうすると数日後に見ることができるのです。今回もそうでした。私は（UFOに）甘えているのかもわかりません。甘えは悪いと知りつつも、ついまた見ることができるよう願ってしまうのです。私はこの頃確信を持ちました。これは「GAPに協力する人を（プラザーズ達は）決して失望させない。それどころか援助してくれている」ということです。今回の目撃は書店への委託と関係ありそうです。

### ①夢で治療を受ける

〈昭和五五年九月ごろの夢〉

胃痛、吐き気などで胃の具合が非常に悪かった時の夢（二週間位続いていた）、誰かが自分の腕より血液を抜いている。その血液を何か操作したらしい。次に自分の肝臓にその血液は戻された。そして「あなたの病気は癒された」という内部の声を聞いた。症状は次第に良くなった。

〈昭和五七年四月一五日ごろの夢〉

医師が私を診察している。そして私の病名は「ピラト」であると言った。私はびっくりして目を覚ました。もしや癌ではないかと起きて本で調べたが、どうも違うようであった。私はキリストを刑場へ送ったピラトと自分を比べて見た。するとよく似ていることに気が付いた。それと言うのも私は四月十八日に行われる自治会の総会で隣の家のことを訴えようと思っていたのです。日頃から様々な悪どいいやがらせをして私を困らせ、神経を疲れさせるのです。この夢を見てから総会で（名前は出さずとも）訴えるのはやめたのです。現在ではこの環境を「目と耳の訓練」のための場として生かそうと思います。でも私は沢山の友達が居ますので決して孤独ではございません。

### ②夢で励まされる

〈昭和五七年三月二二日の夢〉

小柄な、仙人のような老人と、こたつに入っている。自分はこれからどこかに出発することになっている。もう時間だ。老人はこたつのコンセントをはずすと外へ出て自分を見送ってくれた。外気はとてもさわやかで、虹色の霧がたちこめていた。霧は水滴の一粒一粒が日光で輝いているように美しかった。

四月二三日に始めて出勤した職場の仕事は、驚いたことに仕事の始めと終わりには必ずコンセントを入れたりはずしたりしなければならない仕事だった。この様に私はいつも夢によって導かれています。

## 地球上の諸問題と責務

愛媛県　小沢アユ子

久保田先生、お元気ですか？　先日は素敵な御写真と御返事どうもありがとうございました。すごく感激し、二、三日、ニコニコしていました。本当に単純な人間で困ってしまいます。

昨日は松山支部月例会で久保田先生の『生命の科学』第三課のお話を伺い、Balanceの大切さについて深く考えさせられました。忙しさにかまけて世俗的になっていた自分に反省させられ、宇宙的になりたいとい

う欲求から矢追純一氏の『第三の選択の謎』でも読んでみようかと読みはじめ、やめられなくなりました。今、朝四時十五分なのですが、先生にこれは絶対聞いて頂きたいと思いペンを取りました。最初は第三の選択と似たようなことだろうという軽い気持ちから読みはじめたのですが、異常気象、食糧危機、人口増加、核戦争etc、と不安なことばかり書かれていて、「宇宙は無で、存在するのは愛だけだ」とこの不安と恐怖を打ち消しながら読み続けました。しかし先行きの不安はつのるばかりでした。何故このように悪い方向へ行くのか、腹立たしくさえ思えたほどです。しかし最後のフレーズで私は救われました。それは元アポロ14号宇宙飛行士が始めて月面に立ち、そこから自分の美しい故郷地球を見て、「自分たちのいがみあい、騙し合い、その他諸々の愚かなことをしている人間がたまらなく哀れで悲しい存在に思え、自分たちの地球をもっと大切にしなければいけないと感じ、その時見た地球が忘れられないと同時にこのような視野を宇宙から地球を見た時のような宇宙的視野を地球の一人一人が持ってほしい、いや是が非でも知らなくてはいけないと思ったのです」という所になにかものすごく感激してしまいました。自分の今のこの気持を上手に言い表わせなく、もどかしく見えますが、自分という存在が、そして腹を立てたり泣いたりイライラしたりしている自分がアホらしく思え、何かもっとこう大きなものに包まれた感じがしました。先生が駅の雑踏の中で「愛に包まれている」と感じボーッとしてしまったという宇宙を無と包みこむような広大さにはかないませんが、地球の外に立って地球を見ているような感じでした。私も先生のようにもっともっと広く高く登りつめ、先生が感じたような宇宙＝無という感覚を早く感じたいと思いました。

それから話変わって、この第3の選択の謎で、一九八二年にはアメリカの日本への食糧輸出が削減されるという予測をしていました。それはよく考えると今年なのです。これは本当に起こるのでしょうか？　NHK特集『日本の条件』の中でアメリカの広大な土地の砂漠化が映されていましたし、リーダーズ・ダイジェストにはアメリカの莫大な肥沃土の流出について書かれていました。なにを見ても悲観的ニュースばかりです。しかし鈍感で楽天的私にはどうしてもそんな馬鹿な!!　としか思われてならないのです。昔と違い科学の発達した今日私たちがBalanceを崩した以上自然のBalanceを戻す方法はないのでしょうか？　このままずるずる食糧危機に落ち入り、いずれは米ソ共同の火星移住またはスペースコロニー建設しかないのでしょうか。なんとなくピンとこない気がします。移住以外解決策があるとすれば私たちは一体何をすればいいのかな――と考え、結論が出そうもありません。先生はどう思いますか？先生の意見もしろしかったら御聞かせ下さい。くだらないことに悩んでいるのでそのまま聞き流して下さってけっこうですから。

## 秋田支部設立準備進む

秋田市　伊藤正治

初めてペンを取ります。GAPニューズレター（宇宙哲学とUFO）を購読して五年位になる者です。毎号深遠なる内容の記事を掲載していただき興味深く読ませていただいております。今では私にとって人生航路の水先案内書としてなくてはならない本です。心から感謝申し上げます。

この様なすばらしい本はより多くの方に読んでもらいたいというのが私の願いでした。ただ思うだけで行動に移せずに今日に至っている訳ですが、最近、佐々木三羊子さんよりGAP秋田支部準備会をやるから出席するようにとのお誘いを受け、低次元なる私ですがオソルオソル出席させていただきました。案ずるより生むが易しとはよく言ったものです。すばらしい方達の集りでした。山形や仙台からも出席されておりました。すぐ旧知の友の様に語り、意見を交換し合ったりして非常に楽しい会でした。また初めて先生の『生命の科学』の説明のテープを聞き、目がさめる様な感動をいたしました。毎月テープが聞けると思うと、それだけでも胸がおどります。

二回目の会合のときには四名が出席した訳ですが、「もっと会員を増やしてやりたいと思うが名案はないか」というような話になり、それなら「本屋に出して多くの人に読んでもらって、その中の真目面な方に会員になってもらおう」という意見を出しました所、それでいこうという事になりまして、言い出した私がこうして下手な字で下手な文章で恥をしのんで手紙を書いている所です。こんな訳で出入の本屋に話してみた所が「いいですよ」という事でした。加賀谷書店という秋田では一番大きな本屋です。先生も超多忙とは思いますが、詳しい内容をお知らせいただければ、早速こちらで具体的に交渉をしてまとめたいと思います。

佐々木さんと佐藤さんの秋田支部を作ろうという強い熱意に感動して、私の手伝える事をやりたいと思って行動しております。近い将来、先生を秋田におむかえ出来る事を信じております。よろしく御指導の程をお願い申し上げます。先生の御健康を心よりお祈り申し上げております。

## 奉仕とプラス思考の素晴らしさ

千葉県　中里信彦

久保田先生、長い間御無沙汰していましたがお元気でしょうか。久しぶりに手紙を差し上げられて嬉しく思っています。

般若心経のパンフレットをお読みになって御存知だと思いますが、私は直道会へ通って病気の八〇％を治して頂き随分と体が楽になりまた体力もつきました。この直道会へ通うことによって非常に多くの事を体験し、また私自身がまだまだ学ばなければならないことが、沢山あることも教えて頂き感謝しています。私は今まで全く自分勝手に利己的な生活を過ごして来ました。ですから心から信じ合える友人も非常に少ないのです。今まではいつも自分のことばかりを考え、相手に対する思いやりなどほとんどありませんでした。その事を直道会で何度も指摘して頂きましたから、私はこれからは私の治病の体験を生かして、他の人々に奉仕して行きたいと思っています。GAPの会員の中にも難病で苦しんでいる方、交通事故に合って何年も病院のベットに寝たままの方もいると聞きました。私の知識はまだまだ浅いものなのでもっと勉強しなくてはなりませんが、困っている方の為にいくらかでもお役に立てばと思っています。

GAPの中でそのような活動をする事は、もしかするとGAP本来の目的からそれることになるかもしれません。それで久保田先生の御指導をお願いしたいのです。私は性格的にもまだ皆の先頭に立って何かをやるような積極さはないのですが、私自身考えている事は、文通によって励ますとか見舞ってあげて援助するとかの方法です。もちろん宗教的な方法でなく、久保田先生説くところのミラクル・ワードまたは直道会で教えて頂いた方法等です。私は一年間ほど直道会に通って今まで自分がいかに悲観的に生きて来たか、利己的な生き方がどんな結果をもたらすが、これに反して楽観的（プラスの考え方）な生き方がどんなに素晴らしいものか、また心が肉体を支配しているということを学びました。とても有意義な一年間でした。これからはもっとこれらの事を深く勉強し実践し他の人々にも知らせる事が出来ればと思っています。

これからは、またGAPの中で勉強して行きたいと思ってます。これからもよろしく御指導お願い致します。

## 美なるものへの憧れ

大分市　中野　稔

飽食暖衣におちいって浩然の気を見失いかけておりました。本音を文字に託すのは親孝行を公表、自慢する如く、てれくさいものです。本音に至っても同じく、書こうとしても書けないものでして、鏡花水月法と言う手段にて文字を描きます。

幼き頃、ジューヌベルグ原作ラジオ・ドラマ『銀色の砂』『百万の太陽』『北極星から来た少年』を耳にて夢見ました。今でも信じています。それこそ現実そのものだと。スタインベック原作『怒りの葡萄』に至っては小学校の頃読みましたが、光と風と虹のイメージを受けました。何故か最後の授業の哀愁が強く生きています。高校生の頃は映画にて受けた印象とは全く違うと感じました。でも今となってはそのように感じたかったと、そのように信じたかったと、そのようにあってほしかったという願いだったと思います。美しさに引かれると、意識というものの流れを見せつけられたような感じです。

陽気な小供達。彼らはどんな失敗をしようとも瞬時にその失策を回復するに充分な活力があると聞いています。清濁併呑も君子条件がないと感じましたが、小生朱に染まりきってしまったと感じています。それが思い出となる日が待遠しい気もします。

この肉眼で見ても何も見えないと、ことばの綾では暗唱しているものの、習慣という怪物は感じた事をことばにしてしまうのです。ことばにしなければ邪念は生じないのですが、盲に憧れる頃もありました。ものが言えない人にも、耳が聞こえない人にも、そして赤ちゃんにも、小鳥にも、花や風にも、星にも、砂にも……。

（中略）

反省ばかりするのも如才がないので、この辺で暗号という名の文字を描くのを終わらせてもらいます。

## 別れたくない！

沖縄市　新里義雄

GAPの皆様、その後いかがお過ごしでございましょうか。いつの日にか再度お会いしたいと心から願っています。何よりも愉しみにしておりました沖縄支部大会ではございました。大会で先生の御講演を拝聴するのもさる事ながら皆様方にお会いする事がこの上なく愉しみでありましたと敢えて申し上げます。宇宙哲学あるいはこの真相に共鳴し、地球上のあらゆる束縛にもめげる事を知らず、限りなく理想の極地を夢見る求道精神に充たされた真摯な方々に、何故か私のような俗な人間がお会いするチャンスが来るのだ！　これ以上の慶事は今の私には無い！　そこで私は日常の雑事をかたづけてその日のために備えました。そして期待どおり皆様にお会いして多くの素晴らしいものを学び吸収させて頂きました。どうも有難うございました。

大会のプログラムはスムーズに進行しない面があり、その他にも手筈に不備があったりで、そのために充分なゆとりを持った状態で皆様に接することが出来なかった悔は残りましたが、そこは皆さん、やはり宇宙哲学を実践なさっていらっしゃる方々ばかりで、その理解度や包容性は普通の方々にはおそらく期待出来ないだろうと思える素晴らしさがありました。別れたくない！　GAPの方々に私はいつもそんな気持をもっています。

本当に有難うございました。

## 万物を受け入れる門

沖縄県　下地優子

五月のGAP沖縄支部大会ではいろいろ勉強させていただきましてありがとうございました。本土のGAP会員の方々も素晴らしい方ばかりで、もっと御一緒に行動させていただきたかったのですが、二日程しか都合がつきませんでしたので残念に思っております。

五日に守礼の門は見ていただきたい場所でした。テレパシーが通じたのかもしれません。トビラのない琉球独特の門なのです。琉球古来の、全てのものや人を受け入れるといういわれがあるとのことです。

今先生の訳された本を勉強させてもらっております。大人になりきれない大人と悩んでいた自分がおかしく思えます。知らず知らずのうちに宇宙哲学を実践していたのだと気づきました。末長くお導き下さいますようお願いします。

## ●支部設立を考えておられる方へ

暑中見舞には少し早いですがお元気でしょうか。岡山・広島近辺で支部設立を考えていらっしゃる方、雑務のお手伝いをいたしますので是非ご連絡下さい。

〒722－23広島県因島市土生町二〇一

宮地基嗣

## ●おめでとう

(1)会員・渡辺優美子さん（兵庫県西宮市）は去る四月三十日に同じく会員の塩津憲雄氏（京都）とめでたくゴールイン。米西海岸へハネムーン。ご多幸を祈る。

(2)会員・大竹伸枝さん（兵庫県川西市）も六月下旬に八木厚志氏（非会員）とユーゴスラビアで挙式。おしあわせに。

(3)去る五月三十日、会員同士の斉藤泰文氏と寺井津多子さん（いずれも名古屋）の結婚祝賀会が東京GAP会員有志一同により会費制で東京駅構内精養軒で開催され、三十八名出席して盛大であった。「今まで多数の披露宴に出席したけれどもこんなに楽しい立派なパーティーは初めてである」とは斉藤氏の父君の感激のお言葉。東京GAP会員の洗練された企画力と高次な愛の精神を遺憾なく発揮した素晴らしいパーティーであった。

席上久保田会長はギターをかかえて沖縄民謡を二曲うたい大喝采を博した。その他有志による余興で愉快きわまりない雰囲気に満ち溢れ、最後に新郎新婦は参会者全員の腕アーチの下をくぐり抜けてハワイへと旅立った。

出た！「生命の科学」
解説講義の最新版
第1部発行
（第3課まで）
¥700　〒200
本部では扱いませんので、ご注文は下記へ。
〒986-16　宮城県柴田町本船迫内沼田96－2　安藤澄雄
振替仙台7－30019

# 第1回 群馬支部大会

●四月二十五日（日）
●太田市民会館
●出席者　三十二名

昨年七月に久保田会長をお迎えしての月例会からおよそ一年。群馬の県花つつじが咲き出し始めた第一回群馬支部大会は開催地太田市で天候に恵まれ、去る四月二十五日（日）に行われました。

東京から最も近くにある群馬支部の太田市は日帰りできる距離にあり、大会や夕食会にも参加して頂き、それからお帰りになれるという大変気軽な大会ではなかったかと思います。

当日の午前十一時過ぎ、太田駅に到着された会長と同行の会員の方々と共に昼食後、群馬支部会員の中でも根っからの上州人・植松和市氏の司会により午後一時より開催。

会場から窓越しに公園の新緑が見える中、宇宙＝愛（意識）を主体に講演された会長の無限なる愛は、周辺の人々の心に轟き、地球の波動も影響を受け、上昇に役立った事と思います。

質疑応答の際には前のプログラムで不都合な面があり、時間が少なくなり活発な質疑を頂いただけに残念でした。ご参加頂いた方々の熱烈さには「質のGAP」に発展する光景を感じさせられました。

大会終了後、太田グランドホテルにて夕食会。群馬に於けるGAP研究会の土台を築いた久保寺信一氏の乾杯の音頭で始まり、久保田会長御持参のラテン音楽をBGMに友好を深めました。

二次会に於いては近くのレストランにて、客は私達会員だけというあまりない環境で、一味違った素晴らしいものとなりました。

翌二十六日、赤城山へドライブ。一行八名にてまだ緑のない自然を味わいました。ロープウェイにて展望台へ上がり、ここで円盤の観測という事だったのですが、この日浅間山の噴火があり、以前の噴火の際にはUFOが出現した事もあり良い機会だったのですが、残念ながら見えませんでした。

この後、国定忠次の資料館を訪れ、太田へ帰路につき午後六時四十分、二日間の深遠な想い出を残し、松村氏と共に久保田会長とお別れの時間となりました。

久保田会長、会長助手の松村氏、そして御参加頂いた皆様どうもありがとう御座居ました。群馬支部の皆様大変御苦労様でした。

（服部久記）

# 第1回 沖縄支部大会

●五月三日午前十時～午後五時
●社会福祉会館三階中ホール
●出席者　五十名

沖縄支部大会の前日の五月二日午後二時に那覇空港に久保田先生はじめ前日鹿児島から船で来られた熊本支部の首藤氏、島津氏と共に全国各地からの会員の方々総勢二十二名をむかえ小型バス乗用車三台で直接最初の観光予定地であるひめゆりの塔へとむかいました。その日はあいにくの激しい雨でしたが隔日断水で悩まされている地元の人にとっては恵みの雨となりました。バスは次に南部戦跡へとまわり、バスガイドの比嘉氏による大戦の悲惨な戦争体験が話され、今なお残る戦争の傷痕がひしひしと感じられ二度と同じようなことをおこしてはいけないと更めて決意するほどでした。さらに玉泉洞・ハブ展示場などを回ったあと夕方ホテルに到着し、なごやかな雰囲気の中で歓迎夕食会が行われました。

翌三日には十時から支部大会が開催され五十名の出席者の中で田中氏のすばらしい講演の後、久保田先生の「宇宙哲学とUFO問題」と題する興味深い講演がなされ、会員の方々はかなり熱心に聞き入っておられました。昼食をはさみ映画『アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅』が上映される予定でしたが、こちらの不手際で中止となり、急きょ自己紹介・質疑応答にきりかえ無事大会を終了することができました。支部大会終了後の夕食会では会員の方々もかなりリラックスした雰囲気の中で楽しまれ、さまざまな話ができ有意義な一時をすごされました。

四日はすっかり晴れあがり、一同北部観光へと出発し、軍事基地として重要な嘉手納空軍基地の実情を見学し、さらに万座毛・海洋博記念公園と沖縄の美しい空と海を存分に楽しまれました。バスの中でも沖縄民謡を一同で合唱し難解な（?）方言のまじった歌を覚えようと一生懸命でありました。ホテル到着後、久保田先生の希望で沖縄の民謡を聴きたいということで急きょ民謡ショーへ行き、そこでも沖縄の文化や方言の通訳などの質問ぜめにあい、地元にいる私達がなにも知らなくこまるほどでした。

最終日の五日は緑豊かな東南植物楽園でさわやかな一時をすごし、さらに那覇市内のショッピンクを楽しまれ空港へつき無事お送りすることができました。

今回の支部大会は初めてのことでいろいろ不手際もありましたが、会員同士の交流の困難な地理的条件のもとで久保田先生はじめ各地からの会員の方々をむかえられたことを感謝しております。この機会を与えて頂いた久保田先生ありがとうございます。また遠路はるばるご参加頂いた方々に感謝致します。地元の会員の方々も今回の大会でかなり刺激を受け、アダムスキー哲学に対する探求心がさらに高まったようです。この機会に支部長を稲嶺誠一氏にかわって頂き、今までの経験を生かし、よりよき方向に向かうようがんばっていきたいと思います。さらに地元の会員の方々の御協力に感謝します。

（宮城裕記）

# 〈予告〉今年度地方支部大会（その3）

| | 青森支部大会 | 大阪支部大会 | 仙台<br>山形 合同支部大会 | 熊本支部大会 |
|---|---|---|---|---|
| 日時 | 8月1日(日)<br>午前10：00→5：00 | 9月12日(日)<br>午前10：30→5：00 | 11月14日(日)<br>午後1：00→5：00 | 11月21日(日)<br>午後1：00→5：00 |
| 会場 | 「青森県教育会館」<br>2階会議室<br>青森市橋本1-2-25。<br>☎(0177)77-3121<br>青森駅前より国鉄バス「東部営業所」行に乗り「電話局前」で下車。 | 「KBSびわ湖教育センター」<br>滋賀県守山市水保町2892番。<br>国鉄守山駅下車、近江バス名神大津行びわ湖教育センター前下車。 | 「東京第1ホテル仙台」内会議室。仙台市中央2丁目3－18。☎（0222）62－1355。<br>仙台駅より正面の青葉通りをまっすぐ行き、右側。徒歩5分。 | 「法華(ほっけ)クラブ熊本」8F会議室。熊本市西通町20－1。☎（0963）22－5001。<br>国鉄熊本駅前から市電「健軍」行き乗車、「慶徳校前」下車。すぐ隣。交通センターより徒歩6分。 |
| 会費 | ¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥700。グランドキャビネ判） | ¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥700。グランドキャビネ判） | ¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥700。グランドキャビネ判） | ¥3000（希望者のみ全員記念写真代¥500） |
| プログラム | 10：00 支部代表挨拶（中根豊）<br>10：10 講演(鈴木武男・中根豊)<br>11：00 記録映画「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」<br>12：00 昼食・休憩<br>1：00 講演 久保田八郎「日本GAPの使命と宇宙の法則について」<br>2：30 休憩・全員記念撮影<br>3：00 全員自己紹介・質疑応答<br>5：00 閉会 | 10：30 支部代表挨拶 平塚和義(大阪)<br>10：35 講演 仲間秀樹 田中邦安<br>12：00 昼食・休憩<br>1：00 講演 久保田八郎「宇宙哲学の本質とUFO問題の真相」<br>2：15 休憩・全員自己紹介」記念撮影<br>2：45 記録映画「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」<br>3：45 質疑応答<br>5：00 閉会 | 1：00 支部代表挨拶 笠原弘可（仙台） 清水 正（山形）<br>1：10 講演 久保田八郎「アダムスキーは不滅なり」<br>2：10 休憩・記念撮影<br>2：30 全員自己紹介・質疑応答<br>5：00 閉会（今回は久保田会長を囲んで話し合いに徹する会にする予定。） | 1：00 支部代表挨拶 津野田俊行<br>1：10 会員体験講演（有志2名）<br>2：00 講演 久保田八郎「地球外生命と宇宙哲学」<br>3：30 記念写真撮影・休憩<br>3：45 全員自己紹介・質疑 |
| 夕食会 | 大会終了後6：00～8：00まで同会館内別室で希望者による夕食会を開催。<br>会費 ¥4000 | 大会終了後6：00～8：00まで希望者による夕食会を同センター内で開催。<br>会費 約¥4000 | 大会終了後6：00→8：00まで希望者による夕食会を別会場で開催（会場未定）。<br>会費 ¥4000 | 大会終了後6：00→8：00まで希望者による夕食会を神園山荘（同市長嶺町1－11。☎（0963）80－2511)で開催。 |
| 宿舎 | ホテルサンルートをお世話します。<br>シングル1泊¥5500<br>ツイン 1泊¥9000 | 11日と12日の宿泊は同センター(これはホテルです)の部屋をお世話します。<br>ツイン1泊12000程度 | 会場の「東京第1ホテル仙台」をお世話します。<br>シングル ¥4500より<br>ツイン ¥8800より | 会場の「法華クラブ」内の部屋をお世話します。<br>シングル ¥5000<br>ツイン ¥8000 |
| 夕食会と宿舎の申込 | 夕食会出席と宿泊希望の方はハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して7月末までに下記へお申込下さい。<br>〒039-26青森県上北郡東北町字夫雑原541．中根豊<br>☎（01756）3－3386 | 夕食会出席と宿舎希望の方はハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して8月25日までに下記へお申込下さい。<br>〒661 兵庫県尼崎市水堂町3-16-8、平塚和義<br>☎（06）436－3478 | 夕食会出席と宿泊希望の方は10月中旬までにハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して下記へお申込下さい。<br>〒980 仙台市東十番丁一番地国鉄アパート1-18、笠原弘可<br>☎ 0222－95－0725 | 夕食会出席と宿泊希望の方は10月末までにハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して下記へお申込下さい。<br>〒860 熊本市二本木3－12－45、常通寺内、津野田俊行。<br>☎（0963）52－3381 |
| 備考 | 大会翌日は希望者による八甲田山・十和田湖へのドライブを予定。<br>※8月は支部大会のため月例会は中止。 | 大会翌日は希望者のみにてびわ湖一周竹生島めぐりを行う予定です。<br>※9月19日(日)の大阪支部月例会も開催しますのでよろしく。 | 大会翌日は事情により観光はいたしません。<br>※11月の仙台・山形両支部の月例会は開催しますのでよろしく。 | 大会翌日は希望者のみで雄大な阿蘇山へドライブ。車は支部で準備。<br>※11月の月例会は大会のため中止します。 |

■ＧＡＰ今年後半支部大会が上記のように決定しました。各支部とも張切って準備中で、いずれも高次元な素晴らしい大会が予想されます。地方の会員の方々は都合のよい会場をお選びの上、ふるってご参加下さい。

1982年度

# 日本GAP総会

日本ＧＡＰは本年度も下記の要領で総会を盛大に開催することになりました。年１回、全会員が一堂に会し、有意義な講演を聴き、宇宙的な映画を観賞し、宇宙的な雰囲気を満喫する日です。夕方からは別会場で楽しい大夕食会を開催。胸襟を開いて語り合い、高度な次元における熱き友情を確認して、互いに祝福し合おうではありませんか！　多数の方々のご来場を役員一同心からお待ちしております。 ―篠　芳史ほか一同―

■と　　き　昭和57年10月10日（２日連休の初日）

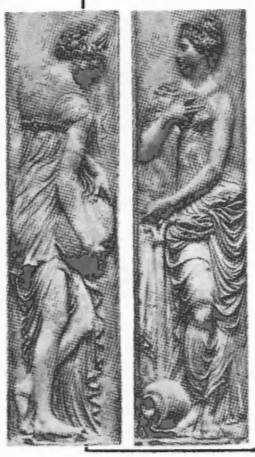
■ところ　皇居北の丸公園内「科学技術館」
Tel.（03）212―8471

東京駅構内地下鉄「東西線」中野方面行きに乗り、隣の「竹橋」駅で下車。外の橋を渡って皇居方面の広い道路を約２００ｍ行き、陸橋の所から右へ曲がって約１００ｍ。右側の森の中。大会々場は地下大ホール。タクシーなら東京駅丸の内北口乗場より５分。料金は５００円台。

■会　　費　￥２８００（当日、受付でご納入下さい）

■プログラム　司会　篠　芳史

| | |
|---|---|
| 9：00 | 受付開始 |
| 10：00→10：10 | 司会者挨拶 |
| 10：10→11：00 | 講演「テレパシーと物理学」<br>田中義則（東京月例会司会者） |
| 11：00→12：00 | 講演「アダムスキー問題とＵＦＯ」<br>久保田八郎（日本ＧＡＰ会長） |
| 1：00→ 4：55 | 映画「十戒」（この映画の解説については本号30頁を参照） |
| 4：55→ 5：00 | 司会者閉会の挨拶 |
| 6：00→ 8：00 | 東京駅構内「精養軒」にて大夕食会を開催（希望者のみ） |



★総会後
6：00→8：00

## 立食形式 大夕食会開催

★東京駅構内「精養軒」２Ｆ大ホール。★会費￥5500（会場入口の受付でご納入下さい）。場所は東京駅丸の内側（皇居側）南口の改札口のスグ横。６：00より司会者と会長挨拶後、ただちに全員記念写真を撮影。遅れないように！　アトラクションとして会員数氏による歌あり。状況によっては社交ダンスも。（２次会、３次会も企画）★夕食会出席希望者はハガキに「夕食会出席希望」と記し、ホテル希望者は宿泊日と電話番号（自宅と勤務先）を記して９月20日までに下記へお申込み下さい。
ホテル＝シングル￥5000程度、ツイン￥9000程度。〒150 東京都渋谷区東３―24―９、サンイーストビル2F　ワールドセブントラベル社、田中 正。 Tel（03）499―2461　夜間は（0462）63―0615（自宅）

# 日本GAP全国月例研究会案内

| 支部名 | 日時 | 会場 | 会費 | 携行品・行事 |
|---|---|---|---|---|
| 東京本部 | 毎月第1土曜日<br>午後2：00÷6：00<br>※10月は東京総会のため月例会は中止。 | 上野公園内「東京文化会館」4階会議室。☎03—828—2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。<br>※8月と9月は皇居北の丸公園の「科学技術館」に会場を変更。11月より「東京文化会館」にもどり，第1土曜日に開催。 | ¥300 | 2：00→3：00会員による体験講演，<br>3：00→4：30久保田会長の「生命の科学」講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。<br>4：30→6：00自己紹介，意見発表，質疑応答。 |
| 大阪支部 | 毎月第3日曜日<br>午後1：00→5：00 | 大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。<br>国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎ 06—436—3478 | 300 | テキストとして「テレパシー」「生命の科学」(文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会 |
| 新潟支部 | 毎月第4日曜日<br>午後1：00→5：00 | 新潟駅前「青年の家」☎ 0252—44—6766<br>連絡先＝足立亘宏　☎ 0252—62—0968 | 200 | テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。 |
| 熊本支部 | 毎月第3日曜日<br>午後1：00→5：00 | 熊本市二本木3—12—45　常通寺<br>連絡先＝津野田俊行　☎0963—52—3381 | 200 | テキストとして「生命の科学」「テレパシー」(文久書林)」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。 |
| 名古屋支部 | 毎月第2日曜日<br>午後1：00→4：30<br>※10月は東京総会のため月例会ははは中止。 | 名古屋市中区古沢町7—1「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331—2141<br>国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。<br>連絡先＝林　国宣　☎ 0586—45—6468<br>武田充弘　☎ 052—622—7339 | 300 | テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表，テレパシー練習，座談会。 |
| 仙台支部 | 毎月第4日曜日<br>午後1：10→4：20 | 仙台市「市民会館」会議室（西公園内）<br>連絡先＝笠原弘可　☎0222—95—0725 | 200 | 東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。 |
| 山形支部 | 毎月第1日曜日<br>午後1：00→5：00<br>※8月は全員で青森支部大会出席のため月例会は中止。10月は東京総会のため月例会は中止。 | 山形市小白川町「社会福祉文化センター」山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎ 0236—42—5181<br>連絡先＝清水　正　☎ 0238—21—5441 | 200 | テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。 |
| 札幌支部 | 毎月第1日曜日<br>午後1：00→4：30 | 中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011—241—9171　連絡先＝伊藤重信　☎011—251—4331 | 300 | テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。 |
| 静岡支部 | 毎月第1日曜日<br>午後1：00→5：00 | プラザー静岡ビル8階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町9—1<br>連絡先＝野口敏治　☎0542—86—7729 | 200 | テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。 |
| 旭川支部 | 毎月第2日曜日<br>午後1：00→4：00<br>※9月は帯広市の十勝ワイン城で出張月例会。10月は東京総会のため月例会は中止。 | 旭川市4条通り9丁目右6号「喫茶ひまわり」2F会議室。☎ 0166—23—9760<br>連絡先＝石川公一　☎ 0166—51—5699 | | 東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「生命の科学」を持参。質疑応答（旭川支部独自で直接会長から回答を得る）別会場にて2次会。 |
| 松山支部 | 毎月第4日曜日<br>午後1：00→4：30 | 松山市民会館会議室<br>連絡先＝伊藤達夫　☎ 0898—22—3060 | 200 | テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。 |
| 群馬支部 | 毎月第2日曜日<br>午後2：00→6：00<br>※10月は東京総会のため月例会は中止。 | 群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。<br>連絡先＝服部　久<br>☎ 0276—63—2163・2771 | 200 | 東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。 |
| 青森支部 | 毎月第3日曜日<br>午後1：00→5：00<br>※8月は支部大会のため月例会は中止。 | 青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2)　☎ 0177—34—0163<br>連絡先＝中根　豊　☎ 01756—3—3386 | | テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表，座談会。 |
| 沖縄支部 | 毎月第3日曜日<br>午後1：00→6：00 | 沖縄市安慶田32—3「社会福祉センター」2階。小会議室。☎ 09893—8—4016・5299<br>連絡先＝稲嶺誠一　☎ 09893—8—2995 | 500 | テキストとして「生命の科学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介。座談会等。（飲食付） |
| 秋田支部 | 毎月第2日曜日<br>午後1：30→5：00 | 秋田市山王7—3—1「秋田市文化会館」和室会議室。☎ 0188—65—1191<br>連絡先＝佐藤春雄　☎ 01889—2—3284 | 200 | テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。 |
| 関東支部 | 毎月第3日曜日<br>午後1：00→5：00<br>※8月のみ第2日曜日に変更。 | 神奈川県川崎市川崎区富士見2—5—2「川崎市立労働会館」第1研修室（7月と8月は第2会議室)。<br>☎ 044—222—4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。<br>連絡先＝千田光明　☎ 0468—36—7198 | 400 | テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表，座談会等。 |

## ★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

**No.74** 主要記事 ●金星旅行記「死と空間を超えて」G.アダムスキー／「日本GAPとアダムスキー」久保田八郎／「超低空に舞い降りた円盤！」末永雅仁／「各地支部大会詳報」／「さらば空飛ぶ円盤」(2)第2章この太陽系内の宇宙活動・第3章宇宙船と重力 G.アダムスキー／その他。

**No.75** 主要記事「土星旅行記」(1) G.アダムスキー／「イメージ法で起こる奇跡」高梨和明／「太陽と神々の国讃歌」久保田八郎／「さらば空飛ぶ円盤」(3)第3章宇宙船と重力(続き)・第4章最近の科学の発達／その他。

**No.76** 主要記事「土星旅行記」(2) G.アダムスキー／1981年度「日本GAP総会講演集」伊藤重信・山口 緑・武田充弘・足立亘宏／「総会の日にUFOを目撃」伊藤達夫・仲間秀樹・橋口真市・松村芳之／「さらば空飛ぶ円盤」(4) G.アダムスキー第5章わが太陽系内の変化・第6章異星人の象形文字／その他。

**No.77** 主要記事「金星には偉大な文明がある!?」／「宇宙と愛について」(1)久保田八郎編／「反磁場による超推進法」W.ラポート／「さらば空飛ぶ円盤」(5)第7章 疑う人に対する回答・第8章 デマとデマ流し屋／その他。

※No.69より71までは各¥500。No.72から¥700。〒各¥200。

## 「生命の科学」解説講義録音テープ

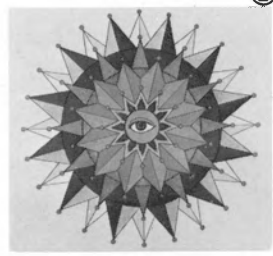
今年度東京月例会において1月より毎月1課ずつ久保田会長が解説される貴重な録音テープ。アダムスキー哲学の理解を深める上で重要な資料となるものです。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。

**テープ1本(90分) ¥1000 〒200**

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(57年1月より毎月録音。1課より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065

①



②

## ①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500〒120 ②¥200〒60一括注文の場合〒120

## ③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。¥500 〒120

## ④テレパシー練習用 ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。

¥500 〒120

日本GAP

## 会員募集

日本GAPはUFO研究会の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

—日本GAP—

## 編集後記

★本号は巻頭の『さらば空飛ぶ円盤』第九章『私は異星人から何を学んだか』が圧巻です。あらためて原書を読み返しながら感動も新たに改訳したもので、完璧な訳文になったと自負しています。重要な内容ですから熟読玩味して下されば幸いです。

★『宇宙と愛について』(2)は実在するある不思議な方と編者との対談録で、このすごい超能力は信じがたいでしょうが、いずれ詳細が判明します。ご期待下さい。

★『沖縄支部大会と南国の旅』は大成功でした。まさに百聞は一見にしかずで、現地をこの目で見ないことには実態が把握できません。たしかに旅行は宇宙的な教育価値をもっています。次号には『エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅』紀行を掲載し、ピラミッドに関して驚くべき情報が洩らされる予定です。

★沖縄支部代表は第一回支部大会終了をもって代表が宮城裕氏から稲嶺誠一氏にかわりました。宮城氏のご尽力に深謝します。

★今夏八月に実施予定の『エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅』はまだ残席あり、七月末までなら間に合いますから至急にお申込下さい。ヨーロッパ七ヵ国をまわる大旅行は今年で最後とし、来年からは短期間近距離旅行となります。ヨーロッパ行き最後のチャンスをお見逃しなきように。

★十月十日の本年度総会も近づきました。三十九頁の予告をご覧の上、ふるってご参加下さい。万全の態勢をしいて準備中で役員一同張り切っています。地方支部大会も青森、大阪、仙台(山形と合同)、熊本の四ヵ所が準備中です。多数ご出席下さい。

★日本GAPで十四番目の支部として秋田支部が発足し、続いて関東支部も誕生しました。秋田支部代表の佐藤春雄氏は東北民謡の達人で純粋な方、関東支部代表の千田光明氏は古くからの熱心な会員です。近辺に在住の方は各支部にご協力下されば幸いです。

★本年一月より毎月東京月例会において編者が続行中の『生命の科学』解説講義録82年版が会員・安藤澄雄氏の手で個人出版されました。三十五頁の広告をご覧の上、直接に同氏宛ご注文下さい。本部では扱いません。

★本誌は会員三十数名の方により全国の主要書店に卸されており、東京の数軒の最大手書店に出まわって売行きは好調です。地方会員の方で地元の書店卸しに協力の意志ある方は編者宛ご一報下さい。説明書をお送りします。協力者には手数料が出ます。

★しかし本会は資金難で運営は火の車です。会員の皆様の応分のご寄付をお願いできれば幸いに存じます。

★昨年四月より編者の助手であった山口緑君が今年四月より就職で千葉県へ移動しましたので、本誌の編集と事務仕事はふたたび編者が独力で行うことになりました。どうもワンマンバスの運転手から抜け切れないようですが、いいでしょう、体力と資金の続く限り頑張って安全運転を続けます。山口君のご奉仕に感謝します。東京月例会の運営や地方出張等には松村芳之君が助手として奉仕されますので助かっています。

★三重県の『新しい文明を考える会』は日本GAPとは全く無関係で交流もありませんからご了承下さい。その他GAPに対するデマに重々ご注意下さい。

(K)

日本GAP機関誌・季刊 夏季号
宇宙哲学とUFO 78号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365-818
TEL.(03)651-0958
振替東京4-35912
一九八二年七月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円